



日本よ、今、闘論！倒論！討論！2024第875回
総裁選・米大統領選の知られざる実態

R6/9/17

パネリスト：

石田和靖（国際情勢 YouTuber “越境 3.0 チャンネル”）

宇山卓栄（作家）

大井幸子（国際金融アナリスト・武蔵野大学客員教授・株式会社 SAIL CEO）

深田萌絵（IT ビジネスアナリスト）

マックス・フォン・シュラー小林（元米海兵隊・歴史研究家）

山中泉（著述家・一般社団法人 IFA (International Freedom Alliance) 代表理事）

司会：水島総

水島「皆さん、今晚は」

一同「(礼)」

水島「日本よ、今、闘論！倒論！討論！2024第875回目の討論となります。今日は、

今、続いております自民党の総裁選、そしてアメリカ大統領選の知られざる実態と、ちょっと週刊誌的なタイトルですけども、現実的に総裁選について言われていない問題、或いは、アメリカ大統領選でメディアに報道されていないこととか、実際はどうだろうというようなことを我々は知る必要があると思います。

例えば、簡単に言うと、今日、自民党本部前で、私も冒頭に参加して演説したんですけども、深田さんとか皆さんもお出で戴いて、抗議の声を上げたんですけども、この総裁選、今言ったパンデミック、新たに行うワクチンの問題とかについて、どの候補も一切、疑念も賛成も反対も言わない。つまり、例えば、この間も2回に渡って万単位の人達が日比谷公園とか、池袋に集まってデモや集会で色んな声を上げているんですけども、これについては、全く報道されない。本当にびっくりするぐらい、一切、新聞もテレビも全然、報道しないです。普通は1万人以上の集会やデモ行進が行われたら、少なくともね、こんなのがありましたよと報じるはずですよ。

これは確実に朝日新聞、東京新聞、毎日新聞から産経新聞まで既成のメディアは一切、報道しなかった。こういう事実もありました。勿論、今日の自民党前の声を上げた時ですけど、総裁選の中で、まず、この日本人の命に関わるワクチンの問題というものが一切、話題にもされていないし、問われてもいない。

今、ヨーロッパで大変な話題になっていて、ドイツも方針を転換するんじゃないかって言われている移民問題ですね。こういう問題も殆ど報道されていない。それから、もう一つ言うと、つい先日、フーシ派がイエメンから紅海をずうっと伝ってイスラエルの本土まで届く、空き地に落ちたよって言っていますけど、或いは、撃墜したよって言っていますけれども、現実には、自称でしょうけども極超音速ミサイルがイスラエルの本土に確実に届いた。これは警告というか、例えばイランが、もし核兵器を持っていたとしたらイスラエルにとって致命的な問題になる、こういう問題にも拘らず、こういったことが殆ど話題にもされない。

こういう総裁選は異常な問題ですね。それで突然、夫婦別性の問題とか、議論もされていないようなLGBTの問題が急に出て来るとか、元々そうですが、非常に偏った報道がされている。

そういう意味で言うと、一体、この総裁選とかアメリカの大統領選って一体、何なんだろうと。つい先日、一昨日ですかトランプ大統領の暗殺未遂。その犯人が逮捕された。銃を構えて待ち構えていたということですけども、この背景を見ると、どうも、ウクライナ戦争の、所謂、反プーチン派の人だというようなことも出ています。未だはっきりしていませんけれども、この問題も、実は、アメリカが最大の同盟国というなら相当、大騒ぎになるはずですね。次の大統領になる人が二度にわたって暗殺されそうになった。日本のニュースを見ると、何処かの高速道路で交通事故があって、一人、二人がって、こういうことは確実に報じているんですね。私はBBCとかCNNも、偏っているなあと思いつつ見ますけども、こういうのでも殆ど凄く取り上げているんですよ。

そういう傾向がありながらでも取り上げているんですけど、日本のメディアは殆ど取り上げない。こういう様な中で、彼らの言う自由と民主主義が行われているという中で、皆さんは、この問題について、今の戦後79年で辿り着いた日本の果ての姿じゃないかということ、それから情報というものは、どういう状態になっているか、段々、気が付いて来ているんじゃないかということで、今日は皆さんと色んな面からお話したいと思います。

では、長くなりましたが出席を戴いている皆さんをご紹介します。まず元アメリカ海兵隊員、歴史研究家のマックス・フォン・シュラー小林さんです。宜しくお願いします」

小林「宜しくお願いします」

水島「はい、冒頭にご紹介していきますね。昨日、ジェイソン・モーガンさんと私がお話したんですけどね、そのモーガンさんとの対談の本で、新刊です」

小林「はい」

水島「凄い題名ですよ。『日本を弱体化させるワシントンの陰謀を潰せ！』と」

小林「はい」

水島「しっかり真正面から言っているというね」

小林「うん、そうですね（笑）」

水島「これも今日のテーマとダブっていますので、御本の紹介かたがたお話しして戴きたいと思います」

小林「はい」

水島「はい、有難うございます。そして著述家で I F A 代表理事の山中泉さんです。宜しくお願いします」

山中「宜しくお願いします」

水島「I F A というのは、一般社団法人」

山中「そうですね」

水島「International Freedom Alliance の略ですね」

山中「はい」

水島「その代表理事の山中泉さんです。宜しくお願いします」

山中「(礼)」

水島「確か山中さんの本もありますよね」

山中「そうですね」

水島「これですか」

山中「この『アメリカと共に沈む日本』と言う（笑）」

一同「(笑)」

山中「あまりにも暗いタイトルになりますけどね」

水島「これも今日のテーマで、シュラーさんの本もどっちもヤバイ話ですけど（苦笑）。はい。ということで宜しくお願いします。そして国際金融アナリストで武蔵野大学客員教授、

株式会社SAI L、セイルのCEO、大井幸子さんです。宜しくお願いします」

大井「はい。大井です。宜しくお願いします」

水島「いつも、このSAI Lっていうので、ちょっと…」

大井「すみません、横文字で」

水島「セイルでいいんですね」

大井「はい、そうです」

水島「はい。SAI LのCEOの大井さんです。宜しくお願いします。そして国際情勢YouTuber『越境3.0チャンネル』石田和靖さんです。宜しくお願いします」

石田「はい。宜しくお願いしまあ～す」

水島「作家の宇山卓栄さんです。宜しくお願いします」

宇山「はい。宜しくお願い致します」

水島「そしてITビジネスアナリストの深田萌絵さんです。宜しくお願いします」

深田「宜しくお願いします」

水島「はい、深田さんの本はこれですね」

深田「有難うございます」

水島「『光と影のTSMC誘致』 ああ、これ、私、読みました。本当に面白い本ですね」

深田「有難うございます」

水島「バレていないヤバイ話が沢山書かれていて、多くの方に、この実態を知って戴きたいですね。実は、この間の討論で、千歳の日本の半導体再興のラピダスの、物凄く杜撰な計画だっていう（失笑）、北海道の報告がありましてね、大丈夫かかっていうねえ、めちゃくちゃですが、これを読んでいたから、余計ねえ、熊本の方もそうなんだけど危ないっていう感じがしました。また、機会があれば、その話をお願いします」

深田「はい、有難うございます」

水島「今日は、こういうメンバーでお送り致します。皆さん、宜しくお願いします。では、早速、議論に入りたいと思います。今、総裁選とかアメリカ大統領選、暗殺事件もありました。皆さん、今、どういう思いで、この事件を見ているか。簡単にお話し戴いてから、議論に入りたいと思います。では、シュラー小林さんから」

小林「はい。まず、一昨日の暗殺未遂。最初、これを見て一匹狼みたいな感じかなって思っていたけれど、段々色々出て来ると、大きい事は、トランプがゴルフをやろうと決めたのは、本当に突然みたい。突然なのに洩れている。ゴルフコースの近くで12時間ぐらい前から、待っていたみたい」

水島「そうですね」

小林「だから何処かのトランプのシークレットサービスとか、守っている人達の中で漏れがあったかもしれない。それか家の方を盗聴しているか。でも、盗聴しているのは誰でしょう。FBIでしょうね。それとかCIAかなとか。だから本当に一人でやっているとか、ちょっと信じ難いんですね。」

選挙のことですね、そうですね。今日は日本時間の17日ですね。18日、ニューヨーク・シティの裁判の、あのストーミー・ダニエルズ (Stormy Daniels) っていうポルノスターに口止め料の判決が出るっていう話」

水島「はい」

小林「でもね、それは11月26日まで延長」

水島「ああ～、そうか、そうか」

小林「2週間前から延長になっているんですよ。だから、判決が、延長したその日から刑務所とかになるかもしれない。だから、暴動も始まるんじゃないかなとか、それで一応、延長になっているんですけどね」

水島「はい」

小林「でも、本当に変な裁判ですよ。多くの所、ジョージア州とか、殆どああいうような色んな虐め的な裁判はね」

一同「うん」

小林「もう、みんな、やめているんですよ。もう、やめていますね。ちょっと、トランプとハリスの討論の話もしたいです。私、全部、観ました。ハリスの方は、顔が凄く神経質。本当に緊張している。英語で、こういう時に緊張しているのは、あんまり良くないんですよ。例えば、ロシアのプーチンに会うとか中国の習近平に会って、何か交渉する時、ああいうような顔ではアメリカは負けよ。別に私は今、日本を応援しているけど、アメリカ、そのまま負けとか、えーっとかね、でも別に言葉が凄く変ではないけど、何か決まりの言葉」

水島「うん」

小林「決まりの言葉を言っているとか、結構、フレーズみたいな感じ。具体的な話は無かったですね」

水島「ないですね」

小林「トランプは一応、具体的だったけど、あの二人の司会者、やっぱり女性の方から出ていたんですよ。私達はFACTS CHECK」

水島「うん」

小林「ハリスには真実確認をしない」

水島「うん」

小林「ハリスにしないで、トランプばかりやっていたんですよ。でもトランプは、ずうっと自信があって…、一つ、結構、気になった嘘の方ですね、アフガン撤退が大失敗になったでしょ。アフガン撤退は本当に困難だった。でもねえ、それをトランプのせいだって、ハリ

スと言っていたけど、すいませんけどアフガン撤退はバイデン政権になってから7か月も経っていたんですよ。だからね、それは、トランプのせいでトランプが悪かったと言えない訳ですよ。勿論、トランプがその前にタリバンと色々交渉があったけれど、でも、それでも言えないですね。

もう一つ言っているのは、トランプが移民の問題について、オハイオ州のスプリングフィールド市とかで、ペットを食べている。猫とか犬とか食べているとか言っているけど、それを嘘ですと。それに対して嘘って言う方は市長。すいませんけど、やっぱり本当みたい。その映像も段々出ているんですけど、それは本当みたいで、それだけじゃなくて車の運転が暴れん坊とか、運転免許を簡単にあげるみたい。そのオハイオ州のスプリングフィールドは、元々人口が5万8千人。そこに突然、1万5千から2万人、ハイチから移民が入って来ると」

水島「そうですねえ」

小林「勿論、こうなる」

水島「半分近くですもんね」

小林「ね。ペンシルベニア州はシャルルロワ。同じハイチの問題が出ているけど、もうちょっと移民の話をしたんですけど、もっと危ないのはベネズエラの件」

水島「ああ、ベネズエラね」

小林「バイデン政権で今、もう3年半以上、3年8か月ぐらい経っているけど、トレン・デアラグアっていうベネズエラのギャング、あとMS-13、これもロサンゼルスギャング。結構、暴力的になっているんですよ。アメリカの内戦が右と左、大都市と田舎で始まっているんですよ。内戦っぽいのが始まっている。トレン・デアラグアは勝手に建物に入って経営者を追い出して、自分達も家賃、取ろうとしているよ。

コロラド州オーロラ市で防犯カメラの映像がありますよ。こういう武装集団、みんな、拳銃とか長い銃とか武器を持っていて、建物に入って行ってトントントントン、パーキングがあるから出て行けと言って追い出すとか何か色々やっている。オーロラ市であった。シカゴも32人のギャングメンバーが入ってきて、警察が来るまでに1時間。1時間経ったら、もういないですよ。もう、顔を見るだけでは誰がギャングかどうか判らない。

ニューヨーク・シティも犯罪の75%はギャング。これは南米からの移民で、あとね、パーミアン盆地ですけど、テキサス州の中でシェルの油田の所で結構、やっているんですよ。何をやっているかと言うと、その油田の所へ行って、銅線を盗んだり、石油も盗んだり、色々な物を盗んだり、誰かが目撃すると虐めをしている。

やはりトランプもディベートの中で言っているんですよ。前から不法移民を強制送還すると言っているんですけど、このたび初めて彼が言っていて、ナショナル・ガード、これ、ナショナル・ガードはアメリカの州兵で、実は陸軍ですよ。陸軍の2級の予備みたいな感じですよ。正直、私も軍隊で色々勉強しているけど、それでは足りないと思う。現役の軍隊も使うしかない。だから私も前から本でも書いているけど、話もしている。

日本でアメリカの軍が助けるようなことを言うけど、もう出来ないから、アメリカ国内でトラブルがあるから。ゲリラ戦争だと、こういうルールあるんですよ。ゲリラが一人居ると、

そのゲリラと戦う為に10人の兵隊が必要。10人から12人」

水島「そうですね」

小林「もうギャングの方は組織的になっているんですよ。警官、殺していいっていうことを上から言われているんですよ。もう本当に大変なことになるんですよ。カマラさんもね、はっきり日本のマスコミが人気、人気って言っているけど、全然。アメリカでは全然。スピーチする方に、スピーチのお客様もバスに乗って追いかけているみたいな感じ（微笑）。あと、最近、やっと二つ目のインタビューがありました。これ、ABCニュースでインタビューしたんですよ。真面な話にならなかった。真面な話になってない。

彼女は英語で言う Word Salad。サラダを作る時、メチャメチャに作るでしょ。ワードサラダって言うんですが、喋るけど意味が無い。例えば、このABCのインタビューで、貴方は、これから現在のバイデン政権から、どういう風に違う政策をしますか。そうですねえ、私の育ちは中級クラスの中、そういう育ちで、だららららら～、その育ちの話で全然、政策の話をしないで笑っている。笑っているだけで政策の話をしない。もう政策が無いんじゃないかなとか思っちゃうんですよ」

水島「何か小泉進次郎と似ているね（笑）」

一同「（笑）」

小林「（笑）何か似ていますね」

水島「その話のもって行き方がね、うん」

小林「私の知っている限りで、彼女の人気のサポートは本当にトランスジェンダー」

水島「なるほどね」

小林「だからティム・ウォルズ（Timothy James Walz）を副大統領として選択したけどね、LGBT関係とかで、今、ミネソタ州でもね、親が子供のトランスジェンダーの治療に反対だったら里親に回す」

水島「はい」

小林「州の警察が来て里親に回すことになっちゃうとか。高等学校の男性トイレに女性の生理の専用のもとかタンポンとか置いているけど」

水島「なるほどねえ」

山中「小学校で？」

小林「小学校です。小学校、ちょっと、それは、もう深く考えたくない。どういう風に使う、いやいや、いや、もう、その話はやめましょう（失笑）」

水島「いや、本当にねえ」

小林「そうですね、あと、私もバイデン政権を褒めるとは思わなかったけれど、最近、ウクライナの方と凄く大切なことがあったんですよ。ウクライナ政府がアメリカからのATACMS、陸軍のATACMSミサイル。それで英国のストームシャドー・ミサイルを長距離でロシアの中で使う。ロシアの中って言うか、2014年にウクライナのクーデターがあった

んです。その時、クリミアが殆どロシア人しか住んでないから、クリミアがロシアになったんですよ」

水島「はい」

小林「今迄、ミサイルを使っているんですよ、クリミアの方、結構、使っているよ。例えば、ケルチ大橋です。ロシアとクリミアが繋がっている。問題はウクライナ人が自分達で、このミサイルを使えません。やっぱりコンピュータ・プログラムなので、衛星からのガイダンスが必要です。やっぱり、これはアメリカ人しか出来ないです」

一同「う～ん」

小林「ストームシャドーは英国人しか出来ない。だからドイツ人もね、タウルス・ミサイルをウクライナに未だ渡していないっていうか、ドイツ兵がやるしかないんですよ。2014年の国境の前にアメリカが撃つことにするんだったら、プーチンも宣言していますよ。アメリカがロシアと戦争中、反応します。反応は核兵器戦争かもしれない。今、キューしたの新しい英国の首相がワシントンに行って、許可をお願いします。そうしましょう、この協力に、クリミアをあげましょう。バイデン大統領、いつもNOって言っているみたい。これはアメリカの外務省がやりたい。ブリンケン国務長官がやりたい。核戦争は危ないですよ。でも、ペンタゴンが、とても反対、特に Jake Sullivan、National Security Adviser は、とても反対。この解決は一応、数週間、伸ばしている。

だからバイデン政権を褒める事はないと思ったけど、バイデン大統領、ずうっと一か月、休み中で自分の家のビーチの近くへ行っているけれど、一応、ワシントンに行って、英国の首相にはNOと言っていますから」

水島「う～ん、なるほどね」

小林「まあ、選挙の話で、今、カマラ・ハリスが殆どスピーチも記者会見も全然、やっていないし、何処かでスピーチやっているけど、さくらみたいな人達が、いっぱい入っているみたいですね」

水島「そうですね」

小林「マスコミが頑張ろう、頑張ろうとかいうけれど、でもインフレと移民問題で、やっぱり結構、アメリカ国民は怒っています」

水島「はい」

小林「はい。以上です」

水島「はい、有難うございます。今、おっしゃったように、外務大臣が二人、ウクライナへ行ったりしている」

小林「うん」

水島「英米のね。アメリカとイギリスの外務大臣。それからCIAとMI6が初めて一緒に会談やったっていうね」

小林「うん、うん」

水島「そういうことになると、今、言ったストームシャドーですか」

小林「はい」

水島「これを使うか使わないかっていう風になってはいますが、そのあと、やっぱり、もう終息のことも相談し始めているんじゃないかっていうね。どういうかたちで、それをやっつから、終わらせるかというね。あと、もう一つ、イスラエルについても、又、皆さんの意見もね…」

小林「フーシも極超音速ミサイル、使っているでしょ」

水島「はい」

小林「それよりも、もっといいミサイルあげるかもしれない。ロシアからフーシにとかね」

水島「はい」

小林「その可能性はある」

水島「そこら辺ですねえ。はい、有難うございます。では、山中さん、お願いします」

山中「はい。やっぱり、この2回目の暗殺未遂ですよ」

水島「はい」

山中「一回目が起きた時、私は丁度、アメリカにおりましてね、みんな、衝撃を受けた訳ですよ。その数日後にミルウォーキーで共和党の党大会があって、僕、参加して来たんですけど、あれで、トランプさんが出て来て、まだ耳の傷にテープを貼っていましたが、あのスピーチを聞いて、共和党は本当に一つになったという感じがしました。ただ直ぐ8月に民主党大会があって、あのカマラ・ハリスが急に出て、バイデンがとにかく降りなかったということで、みんながガクッと、これじゃあ民主党は勝てないねと思ったところで、ある意味、ソフト・クーデターで引きずり降ろしちゃったと。

ナンシー・ペロシが最後に『バイデンさん、辞めるにもハードウェイとイージーウェイがあるよ』と。それってマフィアが良く使う手でね、死ぬ前に、お前、拷問して苦しんで死ぬか、一発で頭をズドンって死ぬか、どっちか選べと（笑）。こういうことで、彼は、しょうがなく辞めたと、非常に怒っていましたよね。まあ、そういうことが起きたりして、その7月8月に大きな事件が起きた、銃撃で耳を撃ち抜かれたり…。

そして、バイデンが降りて、あのカマラ・ハリス、全く3年半、所謂、何の成果を上げたことも無ければ、マスコミもちゃんと上げて報道したことは一度も無いです。ほぼバイデンの陰に隠れていて何も無かったというか、ネガティブな報道しか左派系のメディアでもなかった訳ですよ。それが突然、やはり、あまりにもバイデンが酷いので、このままじゃ勝てないってことで彼女が出て来たということで、みんな、大喜び、こういうことだと思っんです。

ただ、選挙戦になるとね、ちょっと、これを映すことが出来ますか。4~5枚のスライドですけど、これはCNNのものです。僕は、あんまりCNNを使わないんですが、ただ、非常にトレンド的なもので、これは直近、8月末ですね。どういうものかと言うと、激戦州6州を扱ったもので、アリゾナ、ジョージア、ミシガン、ネバダ、ペンシルベニア、ウィスコン

シンですね。これは Among Likely Voters ですから、つまり、投票しそうな有権者の中で、この6州がどっちに転ぶかで勝負が決まります」

水島「そうですね」

山中「ええ、もうカリフォルニア辺りとニューヨークは民主党がひっくり返ることはない。だから、そういう中で、この6州は、どういうトレンドなのかっていうことだけでも、抑える意味でもいいと思います。大体、左側がね、全体的にはどうかって見ると、アリゾナでトランプ5ポイントってあるけど、あとはハリス1ポイントとかハリス5ポイントアップ、ハリス1ポイントアップで、最大の一歩、重要な州と言われるペンシルベニアがタイなんですね。五分五分。ウィスコンシンに至ってはハリスが6ポイントアップでしょう。全体的にはね。だから、これを日本で報道している訳です」

石田「それはCNNのね」

山中「はい。全体的にはね。日本のメディアはやっている。ただ、エコノミーという経済に関して言うと、全部、トランプが、このアリゾナ15ポイントアップから、ジョージア4ポイントアップとか、ミシガン、プラス5ポイント、ネバダ、プラス16ポイントとかね、ハリスが上回っている所でも経済に関しては全部、相当、大幅に有権者はトランプの経済政策がいいと。今、一番、アメリカの大統領選の争点っていうのは、やっぱり経済ですから」

水島「そうですねえ」

山中「ええ、そこがある。あと女性男性で言うとね、女性からの支持は、さてカマラ・ハリスはどうかって言った場合、この左側、現在はね、アリゾナからジョージア迄、プラス3だ、10だ、16ポイントだって、これは、みんな、当然、女性からの評判はカマラ・ハリスがいいんですが、これ、2020年のバイデンの時も結構、女性からはプラスを取ったんですね。トランプも取っていたけど、バイデンも結構、良い数字を取った。プラス3ポイントから多い時は10ポイントぐらいとか13ポイント。

ただ、これを見てね、えっ、2020年のバイデンの時よりも、それ程、大きく女性から、カマラ・ハリスは同じ女性なのに取ってないんじゃないかと。これで僕が思い出したのは、2016年のヒラリー・クリントンですよ」

石田「ああ」

山中「ええ。女性初の大統領候補」

水島「なっていましたね」

山中「ええ。なると言われていた人が全くと言っていいほど、思ったほど女性票が取れていなかったっていうことが、あとから判った。ただね、夏の段階から、私の周りに居る女性、女房も含めてね（笑）ほんとにヒラリーは嫌われていた訳です」

小林「う～ん」

山中「ヒラリーが、どれぐらい女性から嫌われていたかっていうことは、まるで、日本のメディアでは報道されなかった」

水島「そうですね」

山中「だからヒラリーは取れると思ったようです、同じく黒人票もオバマと同じく取れると思ったんです。だから全く同じ戦略をとったんですよ。でも黒人票も女性票も全く取れなかった。どうも、ちょっとね、僕はそんな感じがして、カマラ・ハリスって、それ程、女性から好かれているタイプではないような気がするなど」

水島「そうですねえ」

山中「あとは男性ですね。男性になるとね、2020年も非常に、ほぼトランプ2ポイントアップ。12ポイントと強いんですが、今回、更に伸ばしているんですね。トランプは非常に男性票に強いことが起きている。それでヒスパニック。今、一番、非常に重要なマイノリティで、一番数が多いって言われています。ヒスパニックは人口の16%から18%居ますから、その中で言うと、現在、ハリス6ポイント。ただ、前回、2020年度は、バイデンがプラス24ポイントだったんですよ」

水島「ああ〜」

山中「ええ。だから、それから比較すると、グッと落ちちゃっているんですね」

水島「そうですねえ」

山中「ええ。ネバダもプラス26ポイントが20ポイント、これは、そうでもないですけど、ただ、ヒスパニックは基本的にずっと民主党系ですから、民主党は福祉、ばら撒きますからね。ただトランプは人気がありますから、共和党が相当、食い込んでいます。

これが最後で重要です。無党派層がどちらに靡いているかとみると、アリゾナ、ジョージア、ミシガンではトランプが今年、勝っているんですね。ただ前回、2020年はバイデンが9ポイントとかプラス6ポイントとかでしたが、今回はその下の3つのネバダ、ペンシルベニア、ウィスコンシンに関しては、ハリスが3ポイントアップ、プラス、ペンシルベニア20ポイントでねえ、僕は、この数字が、ちょっとおかしいんじゃないかと思うんですが、いずれにしても3対3ということで、これも、やはり無党派層が結果を分けるって言われています。

大きな流れで言うと、女性からは、やはりカマラ・ハリスが取っている。でも男性は圧倒的にトランプ支持が大きい。この流れは変わらないと思う、ただ、この最後の無党派層なんかはね、この2か月間の色んなニュースによって、どんどん変わってくる可能性があるんで、私自身は未だ、色んなところを、まあ、ある程度、フェアなところも、それから主要メディアの報道を見ても、ほぼ拮抗していて、どっちが上か下か分からないっていう、まあ、これにしてもCNNの統計では途中で相当、いつもはね、CNNは物凄く偏った統計しか出して来ないですよ」

水島「そうですね」

山中「ええ。自分のところの視聴者から取ったりしていますからね」

水島「あれも凄いですよねえ、ほんと」

山中「ええ。あれ程…」

水島「見ると、ビックリするぐらい、よく言えるわというね、うん」

山中「ええ、よく偏りますね（苦笑）。でもね、他にもNBCもABCも、まあ、CNNも

ね、ニューヨーク・タイムズにしても、やはり偏っているなど。だから、どっちかと言うとインディペンデント、独立系の中小の小さな統計会社の方が、僕はずっと信頼していて、そっちが結構、当てるケースが多いものですから、そういうのを見ているんですけど。そして、僕はさっきも申しましたけども、暗殺っていうのは、二度あることは三度あるって、日本の諺でもありますね」

水島「うん、そうですねえ」

山中「僕は、あってもおかしくないと思う。1回目に暗殺未遂が起こった時、僕は、また2回目があるよって直ぐ7月に言っていたんですけど、まあ、起きた。犯人が同じか、後ろの人物がどうかっていうことは全然、出ていませんが、必ずあると思っていて、ただ、暗殺だけじゃなくて、今、また、新たな訴訟が起きましたよね。これが前後して終わる、特に大統領選挙の前は続くし、ありとあらゆる違う攻撃が今、民主党側から起きているのと、あとで、また、この話をすると、引っかかっちゃうかも分かんないんだけど」

水島「うん」

山中「投票、不何とかで違反をしたという、その2020年の最大のバイデン・ジャンプのようなものを、今回も、僕は、民主党の党員の人とか元党員の人達が近くに居るので聞いているんですが、やはり彼らは何か仕掛けていますね」

水島「まあ、そうですね」

山中「ええ。非常に大きく仕掛けていて、前は郵便投票を使ってやりましたよね。ええ。死んだ人の住所から何千人も入って来たとかね。アメリカは住民票とか戸籍がありませんのでね」

水島「そうですね」

小林「うん」

山中「もう何も出さなければ10年、20年、30年前に死んだ人の住所に郵便投票用紙がボンボン行くと」

小林「うん」

水島「そういうことですよ」

山中「はい。だから、商業用の住所だとか、或いは、空き家から返って来たものもあるとかね。それは今回も起きるだろうけども、あの時は、コロナがありましたから、多くのありとあらゆる郵便投票が民主党に使われましたけど…」

水島「あの時は、それでしたんだよね」

山中「はい、民主党は使ったんだと思います。今回は郵便投票だけでなく相当、ありとあらゆることをね、今年は、私が思っているのは、1千800万人とも言われる不法移民達」

小林「ああ、ああ」

山中「不法移民だから当然、投票できませんよね。ただカリフォルニアとか、いくつかの州では、とにかく、なるだけ早く彼らに投票権を与えちゃおうとかね」

小林「うん」

山中「こういう動きが起きていますし、実際、陰謀論でも何でもなく、この間、ジョンソン下院議長が、はっきり、この動きをやっているから絶対に阻止しなきゃいけないとか、そういうことも言っていて、前回まで駐日大使だったビル・ハガティ上院議員とかも同じことを言っている。つまり不法移民に直ぐ投票権を与えなくても、不法移民がそこに大量に来ますと、その選挙区の人口が増える訳ですよ」

小林「うん」

山中「そうなりますと、その人口が増えると議員の数が増える。所謂、日本語で言うと、区割りが変わるっていうことで、それを狙っている。そうすると民主党州は、そこで議員が一人増えるとかね。大きく言うとカリフォルニア州では、例えば、そこで選挙人の数が増えるとかね、今、それを狙って仕掛けをしている。非常に怖い合法的な、或いは、非合法的なことを両方使ってやっているかなという感じがしますね」

小林「うん」

水島「はい」

山中「ええ」

水島「有難うございます。今、丁度、言ってくれたので、アメリカには我々の様な戸籍制度が無い」

山中「はい」

小林「うんうん」

水島「今、丁度、総裁選でやられている夫婦別姓」

山中「はい」

水島「このスタートは最終的には、日本の戸籍制度を無くす、ここまで繋がっているっていうことも今、せっかく言って戴いたんで、ちょっと引っかけておいて下さい」

山中「はい」

水島「はい。有難うございます、では、大井さん、お願いします」

大井「はい。私は日本の総裁選とアメリカの大統領選と丁度、時期的に重なったっていうのが凄く思うところがあって、同時に日米の55年体制が終わるっていうことだと思います」

水島「ああ～そうですね」

大井「社長がおっしゃった戦後80年で、もう今、終わるところに来ていると。だから自民党も終わるし、それからアメリカを形作って来た今迄の在り方っていうのもトランプが出て来たことによって揺らいで、今回、トランプさんが当選するかどうかで、それが決着つくってという凄く大事な際に来ていると思います」

水島「そうですね」

大井「それで戦後80年っていうことですからけれども、トランプさんが出て来た2016年に、スティーブ・バノンがパンドラの箱が開いたと」

水島「はい」

大井「トランプが出て来て、はっきりDSをやっつけるって、彼は言ったので…」

水島「はい、言いましたね」

大井「これで、あらゆる悪魔が飛び出したって、はっきり言ったんですよ。パンドラの箱が開いた。それでね、最初、何を言っているのか私も解らなかつたんですけど、今は、非常によく解ります。トランプをどうしても消したい人達が居て、今、山中さんがおっしゃったように暗殺未遂もあるだろうと。私は、今のアメリカの中の人達っていうのは、そんなに阿呆じゃないから、いかにカマラ・ハリスがインチキで何の正当性も無い人間かって分かる訳ですよ。国民から選ばれた訳じゃないし」

水島「うん」

大井「誰があんたにやって欲しいって言ったのよっていう話じゃないですか」

水島「うんうん」

大井「でも、何か、こうね、偉そうに、一体何ですか、この人はっていう感じで見ているので、普通に不正が無ければトランプ圧勝だと思います。私の知り合いが居るボストン周辺のマサチューセッツ州は民主党の鉄板ですけども、彼女の話によると、郊外の家々のヤードに立て看を立てますよね。今、どっちを応援しているって、トランプ／バンスの立て看がいっぱい立っているよって言って、えっ、マサチューセッツ州で？（笑）。何か、そんな話をしたばかりですけども」

水島「おお～」

大井「やはり合理的に考えれば、自分達の生活を守る為にはトランプさんのような資本主義に準じる経済政策と、それからアメリカの憲法、Founding Fathersに戻ると。アメリカ流の護憲ですね」

水島「うんうん」

大井「この二つの基本に戻るっていうことが大事だって、みんな、解っている訳ですよ。国民の心底、この心情として。だから当然、トランプさんに投票する訳ですけども、問題は、まず、その経済のことを申し上げますと、トランプさんは、規制緩和、減税、それから資本主義による国民経済を復活させると」

水島「うん」

大井「だから今迄、海外に出た製造業を国内に戻す。まあ、関税をかけて、中国に高い関税、貿易障壁を設けるとか色々言っていますけれども、実態的にはアメリカの主権を守る。アメリカの中に製造業を育てて、それで経済を成長させると。はっきり、ここは主権国家だぞと」

水島「うん」

大井「我々には、そのFounding Fathersの作った法体系があると。国際的な機関、例えば、

国連とか気候変動だとか、色々な国際的な機関で二酸化炭素の出し過ぎだとか、ああだこうだ言われて、じゃあ、EVにしましょうとか、これ、何ですかと。自分達の政策を決めるのに、何故、国連だとか国家を超えた主権を超えた団体の言うことを聞かなければいけないんだって、まあ、そういう発想な訳ですよ。

だからアメリカの主権に戻ると。さっき言いましたが、どちらかと言うと減税、自由に経済活動して貰う。カマラ・ハリスというのは正反対で、とにかく規制する。大きい政府、大きい連邦政府」

水島「うんうん、うん」

大井「価格統制もしますよと。貧しい人が食料品を買えないと困るでしょ。じゃあ、食料品の価格を統制しますとか、家も造ってあげますよと。みなさん、この住宅に住んで下さい。だけど住んだら住んだで、例えば二酸化炭素を出すからガストーブを使うとかですかね（苦笑）」

一同「（苦笑）」

大井「色々な事をやる訳ですよ。そういう風に、あらゆる規制をかけていくと。規制をかけると、どうなるかって言うと、大きな政府ですから、沢山、税金を吸い上げる。自分達がばら撒く為にね。自分のポケットマネーじゃなくて国民から集めて来る訳じゃないですか。ということは、一般の人の税金が上がる。予算が大きくなるから、財政赤字が増えるとインフレになると。もう目に見えているじゃないですか。

所得税も税率最大44.6%にするとか、キャピタルゲイン税も33%にするとか、これは経済を壊すよねって、もう一目見て分かる訳ですよ。何故、こんな人を応援するのかっていうと、やっぱりマイノリティの人達は、ばら撒きが欲しいとか、そういう人達も一定数、居る訳じゃないですか。だけど普通に生活している人から見れば、合理的に考えて経済的に成長していくにはトランプだね、っていうのは普通に解る訳ですよ。

それから正当性っていう問題でも、トランプの政策に基づく元々のアメリカの主権国家である憲法、Founding Fathersの作ったものを守るとか非常に根本的に解り易いし、依って、その宗教の自由とか信仰の自由とかで、別に移民に反対している訳じゃないと。元々移民国家だからアメリカは。ただ不法移民、さっき山中さんもおっしゃったように不法移民はいけないと。何故かと言うと、地元のコミュニティを全部、壊す訳ですよ」

水島「うんうん」

大井「コミュニティを壊すっていうのが、要するにアメリカの原理原則で結びついている人達の絆を全部、ばらかしてしまおう。トランプがカマラ・ハリスのことを新しいマルキストって言っていましたけど（笑）、共産主義的な、社会主義的な経済体制と、そういう監視国家を創るっていうのが彼らの究極の目的だと思うんですね」

水島「そうですね」

大井「だから、はっきり言うと、もう人類家畜化っていうところまで行き着く先が見えて来る訳ですよ」

水島「うん」

大井「まあ、価格統制だとか所得税に対する増税だとか色んな事を言っていると。今、思い出したんですけど、日本の総裁選でも金融取引税かけるなんて言っている人が居ますよねえ」

水島「あれも居ますねえ、はい」

大井「だから何か経済を壊す、増税して、これ以上、国民から搾り上げてお金を取って何してくれるんですかと。もう余計なことをするなって、私なんか思うんですけども、もうちょっと、アメリカのことよりも日本のことを申し上げたいですけど、今、55年体制が変わるんじゃないか、完全に自民党崩壊するって、私は思っているんですね。戦後、アメリカが占領して、米軍が暫く駐留したじゃないですか。朝鮮戦争があって、占領が終わったよっていうことで日本から引き揚げていくと。

その時に駐留米軍の撤退に備える為に55年体制っていうのをつくって、それが岸信介だとか、その系列でずうっと続いてきた訳ですよ。その人達は世襲で政治家も世襲で繋がってきたし、それから利権。アメリカの利権ともずっと繋がってきたと」

水島「はい」

大井「更に言うと、もっと満州国の利権からも全部、繋がって来て、凄い闇のところがある訳ですよ。でも、それがトランプの登場によって、トランプは、そういうのとは切り離してグローバリストは切り離して主権国家に戻るって言っている訳だから、じゃあ、日本はどうするんだっていうところで、これ、凄い問題ですよ。じゃあ、これから日本っていう国がどういうビジョンで何に基づいて、どうやって生きていくんだっていうことが凄い突きつけられているのが今の状況なのに…」

水島「はい、本当はそうですね」

大井「今の状況なのに次期総裁候補っていうのは、何かよく分からないことばかり言っているんですね」

水島「ええ、そうですね。ひとりとしてね、今、55年体制が、実は自民党のああいう単なる裏金問題じゃなくてね、そういう体制全体が終わりを告げ始めているというね」

大井「そうです」

水島「ああ、始めているんじゃないくて、もう終わっているっていうね」

大井「終わっているんです（苦笑）」

水島「そこのところで、どうするかっていうことをやらなきゃいけないのに誰も言いませんからね」

大井「誰も言わない、まあ、そんなことを言ったら、政治家、やっていられないのかもしれないけれども」

水島「（失笑）」

大井「でも、とにかくああいう世襲はやめるべきだし、もう少し、じゃあ、どうやって日本という国は、これから存在して国民の生命と財産を守って生きていくんだっていうところを、もう、そもそも論から、しっかりやって貰わないと」

水島「そうですねえ」

大井「私は、アメリカはアメリカでやり方があって、今、一生懸命、戦っている訳ですけど、日本は日本で、もうちょっと真面に国民も考えていかないと、大変なことになるんじゃないかと危機感を持っています。特に、これからレイムダック化したバイデン政権ですね、未だバイデン、生きていますから（笑）」

一同「（笑）」

大井「それで、もう、こんなになっちゃっても生きている、そうそう、レイムダック化してもね。日本も総裁選で誰か総裁になって次の体制が固まるまで、ふにやふにやじゃないですか。そういう時に限って、例えば何か中国の領海侵犯だとかね、北朝鮮がミサイルを飛ばすだとか」

水島「うん」

大井「加えて地震だとか大津波だとか色んなことが起こる可能性がある訳ですよ。その時に、誰がちゃんとリーダーシップを執れるのかっていうのも、私は非常に危機感を持っています」

水島「まあねえ、この枠では、はっきり言っちゃっていますけど、全部、駄目だっていうことを言わなきゃいけない。ところが、よりマシな人を選ぶっていうね、昨日、ジェイソン・モーガンさんと対談した時、彼は、みんな毒だから、赤い色、黄色、この色が好きだから、こっちを選びたいって言ったって駄目だと。私は、もっと汚い言い方で、どうしようもない使い物にならないぐらい汚い便所で、その個室は、何処に入っても駄目だけど、それでも一番、その中でも、ちょっとでもきれいな便所に入りたかって、こんなことをやるんかかっていう話をしたぐらいのつもりで自民党員は総裁選を臨まなきゃいけないんだけど、そこまで全然、いってないっていうね、今言った55年体制の終わりが来ているのに、まあ、岸田さんが選んだのはバイデンにベッタリすることで、多分、小泉さんなんかになると、また引き続いてハリスさんにベッタリしようというような状態、本当にそれでいいのかっていうことが問われているんですけども、こういう状態。今言ったように政治家達が本当の意味で大きな時代の変換点を受け取ってないというね」

大井「そうですね。あと、世界観がね、あまりにも世界とずれているので、どうするんだろうという、はい」

水島「そうだね、一周遅れのトップランナーみたいなもので、はい」

大井「う～ん」

水島「はい、有難うございます」

大井「有難うございます」

水島「石田さん、お願いします」

石田「はい、もう大井さんも素晴らしいことをおっしゃってくれて、大体、全部、言ってくれたような感じですけど」

大井「そんなことないです」

小林「（笑）」

石田「本当に、この今回の総裁選って、もう日本の終わりの始まりなんじゃないかっていうような感じだと思うんですね。結局、誰が総裁になったところで、恐らく言い換えると、カマラ・ハリスがやろうとしていることを誰がやるのかっていう選挙だかっていう感じですよ。まあ、増税でしょ、傀儡で言論統制でという方向は恐らく誰がなっても変わらなくて、冒頭で水島社長がおっしゃったように、もう誰一人としてねえ、この具体的な経済対策とか減税とかね、もう、そういうことに一切、触れないし、まして裏金とか脱税疑惑なんか、もう、あんなの誰も触れようとしなないしね」

水島「うん」

石田「結局、僕も色々と候補者のYouTube動画とか主張している動画を観たんですけど、その裏金問題について、どう思いますかって言ったら、結局、自民党としてはやれるべき処分はやったっていうようなことを、みんな、言っている訳ですよ」

水島「そうですね」

石田「でも普通に、我々の民間の世界から言ったら、あんなの普通は、もう一回、修正申告を出して…」

水島「そうだよ（苦笑）」

石田「税金を払って、場合によっちゃ、重加算税とか追徴課税とか払うのが当然じゃん」

水島「うん」

石田「でも、そういうのは一切やらないで、終わったふりになっているっていうのが、そもそも国民は納得いかないですしね」

水島「うん」

石田「誰一人として減税を言わないでしょ」

水島「うん、言わないですね。消費税は絶対に下げませんって言ってね」

石田「いや、そうそう」

水島「高市さんが言っていますね」

石田「だから、そうなんです。その消費税が一番、癌であって、原口議員を筆頭に、みんな日本弱体化装置なんて言っていますけど。僕も20代の頃、ずっと会計事務所で仕事していたから法人税とか消費税の申告書を作るのが仕事だったんですよ。20代の若造の時から、ちょっと消費税を勉強すると、いや、この税法は違和感あるなって気づいていた訳。これは誰もが、ちょっと勉強すると、消費税の違和感が多分、解るんですよ。

まず、今、日本の国内で騒がれているのは、もう賃金が、ずうっと下がり続けているとか、非正規雇用の人達の社会保障が無いから、みんな、将来不安で子供産まないから少子高齢化が進んでいるとかね、まあ、色んな問題があちこちでありますけど、ある意味、その問題の根源は全部、消費税じゃないかっていうぐらい結構、大きい問題ですよ。

消費税っていうのは、簡単に言うと受け取った消費税から支払った消費税、で、さっぴいて、残ったものを納めますっていうのが消費税じゃないですか。その中で何故、正社員のお給料

は受け取った消費税から差っ引けないのかっていう、消費税、非課税っていう感じになっているんだけど、でも派遣社員のお給料っていうのは消費税の控除が出来るから、だから会社は、みんな、消費税を出来るだけ負担を少なくしようと思うと正社員を切って、或いは、正社員の賃金を下げて、非正規雇用、派遣社員に切り替えていくっていうことが何年間もかけて行われて来たんですよ」

水島「うんうん」

石田「何故、それに気づかないのかって、賃金が下がって当たり前だし、みんな、非正規にどんどん移り変わって当たり前だし、非正規になったら、結局、300万円の給料を貰えるところ、100万円、すっぱ抜かれたから手取りが200万円になる訳でしょ」

水島「うん」

石田「手取りっていうか総支給額が。そんな、賃金がどんどん下がっていくに決まっている訳ですよ」

水島「うん」

石田「だから、この賃金が下がるだの、お金がどんどん減っていく。所得が減っていくから、もう子供を産む余裕もないよね、結婚も出来ないわあなんて若者が増えている訳でしょ。もう、こんな状態なのに、また消費税を上げると言っているとか」

水島「うん」

石田「今度、消費税の税率を上げたら、もう田舎の方の小さな中小企業、零細企業なんかは消費税の税率が上がるだけで事務負担は増える訳ですよ。その中で非課税、不課税、課税対象でも色々あって、それで、更に事務負担させられるし、簡易課税制度だの原則課税制度だの、とにかく複雑怪奇な制度で、日本人のお給料が上がらない制度なんじゃないかって、20代の頃から、ずう〜っと思っていたんだけど、それを労働組合とかは多分、社会保障の為に消費税が必要なんだあって言っている労働者の一部の方々がいるんだけどね、自分達の賃金が下がるのに消費税を上げた方がいいって言っている方々は、自民党の策略にまんまと上手く騙されているんですよね。

消費税を上げれば上げるほど、皆さんの賃金は下がるんです。これを一刻も早く止めなきゃならないし、場合によっては一刻も早く消費税、廃止ですよ。そこまで一気にやる事が出来なくても、まず目先は減税ですよ。減税して、あくまでも低税率とか無税国家の方が今、成長していますし、松下幸之助先生も無税国家を30年間かけて創ると言っていたぐらいでね、無税というところで、じゃあ、何処からお金を取るのかって、これは正にトランプさんと同じ考え方で、敵国から取ればいいじゃないかと。外国から取ればいいじゃないかと。それで国民所得税は廃止するんだって言っている。そういった愛国的な考え方が国のリーダーについていかないと、これ、もうねえ、日本人もいよいよ路頭に迷いますね」

水島「そうですねえ」

石田「どんどん所得が減って、その一方で、でも増税はされて、インフレも進んで、もう、生活出来ないよ、っていう人が、どんどん増えていく訳ですよ。だから、この今回の自民党総裁選っていうのは日本の終わりの始まり」

水島「うん」

石田「誰が総裁になったところで、結局は増税、傀儡、言論統制の方向ってというのは、その差はあるにせよ、その方向性は変わらない訳ですよ。だから一刻も早く、国民が気づかないと駄目」

水島「そうですねえ」

石田「国民一人一人が気づいて、それで選挙に行く。或いは、選挙に行った時に自民党以外に投票するっていうことを一人一人がやっていかないとね、この今の日本の社会って言うのは、マジで、もう崩壊しますよ」

水島「そうだねえ」

石田「この国会議員達は、自分だけ、今だけ、金だけですから。国民の方に全く目が向いていないですもん」

水島「そうですね」

石田「うん」

水島「その視点が本当にここまで徹底しちゃったっていうかね。国民目線じゃないね」

石田「実際に徹底していますね、ある意味ねえ」

水島「凄いですよ。昔、江戸時代は五公五民って言われてね、お上に50%を納めてね。今、日本のお金納めは、それ以上になっていますからね」

石田「そう、だから国民負担率は社会保障費とか住民税とか、そういうものを全部、ひっくりめたら多分、収入の5割以上が持って行かれている訳ですよ」

水島「まあ、向こうにいつている…」

石田「でも365日の内の180何日間か、もう税金の為に働いています、みたいな」

水島「という感じになるんだね」

石田「ねえ」

水島「それと、これも、皆さん、具体的にお解りになると思うけど、インボイス制度っていうのは、どれだけインボイスとマイナンバーカード、今、みんな、拒否していますけどね」

石田「そうですね」

水島「町のお医者さんでお年寄りのお医者さんは、殆ど辞めています。何か機械が800万円ぐらいかかるっていう。あのマイナンバーカードでね」

石田「1台が70万円って言っていました。だから10台入れたら消費税込みで、やっぱり800万円ぐらいになると思うんですけど」

水島「ああ、そうなんだ。こんな金を使ってまでやりたくない。うちは、もう一人医者で女房が一人看護婦さんでというような感じで、町医者でも割と地方の寂しい所、みんな、医療従事していたのが、もう面倒臭いし歳だからやめると。本当にねえ、こういうことで、ど

んどん町医者がやめていますね。私の知り合いも、実は事務所と土地を使っていいよと言ってくれた北海道の歯医者さんもやめるって」

石田「う～ん…」

水島「理由はそれですから。もう、やる意味がない。本当は、みんなの為にやっていたんだけどね」

石田「うん」

水島「ここまで自分が苦勞してやるのは、もう歳だから辞めるって、諦めたって言ってね。こういう人、多いですよ。おっしゃるように、本当に、この重税感とか圧迫感とか、希望が無い感じっていうのが蔓延していますよね」

石田「水島さん、その医療機関が導入するマイナンバー端末を作っているのはNECですよ」

水島「ああ」

石田「それでNECの株主構成を見たら、もう何とかストリートとかねえ、JPモルガンとかね」

水島「ああ、やっぱりねえ」

石田「その辺がばあ～っと上位株主ですよ」

水島「う～ん、もうね、マイナンバーカードもそうだけど、視覚障害者とか、そういうところまで中々いっていないんですよ。結構、作っちゃったあつていうけど、ああ、そうか、視覚障害者は見えなかったねえとかね。本当に馬鹿みたいなのが結構、多いんですよ。だから、視覚障害者の方から連絡があった訳だけども。役所を機械化するのはいいけど、そういう人達のことを全然、考えていない」

石田「う～ん」

水島「年寄りもそうだしね、年寄りって言っても、やっぱり誰でもある意味で障害を持つようになる訳ですよ。身体障害も耳も目もね、みんな、不自由になる訳でねえ、そういうことが全く考えられていないっていうことがよく解ります。何だか冷たくて嫌な社会だねえ（苦笑）」

石田「う～ん（失笑）」

水島「まあ、酷い話がどんどん出て来るけども、宇山さん、お願いします」

宇山「はい。私からも、この総裁選についてお話をさせて戴きます」

水島「はい」

宇山「今、高市さんが追い上げて来ていると言われておりますけれども、それでも、やはり全体として小泉進次郎氏がトップに来るのではないかとと言われております」

水島「そうですね」

宇山「この小泉さんが夫婦別姓制度を政策の1丁目1番地に掲げていて、そんな候補がトッ

プを走るなんていうのは、もう世も末だなというように、私は思います」

水島「うん」

宇山「どうして、この夫婦別姓制度が駄目なのかという本質的なところは、先程、水島社長もチラッとおっしゃいましたけれども、まず、この夫婦同姓を根拠とする今の戸籍制度です。この戸籍制度が夫婦別姓によって壊されていきます。戸籍制度が壊されると、これは我々が先祖を遡る手段っていうのが無くなってしまいます」

水島「うん」

宇山「ということは日本人が日本人であることのアイデンティティを失ってしまうということですね。これによって誰が一番、得をするんだと。これは、なりすましの外国人に決まっている訳です。我々が日本人であるというアイデンティティを失わされて、日本は周りを敵対国に囲まれています。アメリカとかヨーロッパとは全然、違う訳です。こういう人達がなりすましになって、日本をサイレント・インベーションしようと日々企んでいる訳ですね。

そういう中で戸籍制度を破壊して、民族のアイデンティティを失わせて精神浸食していこうというアリの一穴にさせられるっていうのが、私は、この選択的夫婦別姓だと思います。こういうことを言う人が居るんですね。これは選択的なものだ。だから自由に選べるんだと。もし同姓でいいという人がおるのであれば、その人には自由があるんだと。だから、個人の勝手ですよっていう言い方を、よくされるんですけどもね、私は、そうは済まないと思うんですね。

今も言うように、これは国家の安全保障にさえ関わるような重要な事態であって個人の自由で済むような話ではないし、他人に迷惑をかけないでしょう、いやいや、これは、大迷惑がかかるという話だろうと思いますよ。それから、この総裁選で一番、重要で大切なことは、我々が男系の皇統をちゃんと守ってくれる候補者を選んでいくということが大切なことだと思うんですけども、今、河野氏や石破氏は女系継承を容認している訳です」

水島「そうです」

宇山「まあ、石破さんは、今の悠仁親王殿下の順位迄は変えないとは言っているんですが、そのあとのことは保証の限りではないと。女系継承も容認し得るということを言っている訳です。そして、今、話が出ている小泉進次郎氏のお父さんの小泉純一郎氏の時に、政府有識者会議を創りまして女系継承容認という形でもっていこうとした。それが、悠仁親王殿下の誕生によって、すんでのところで止められたというのが18年前のことでした」

水島「そうでしたね」

宇山「今、小泉進次郎さんは男系継承の重要性を認識していると、しおらしく言っていますけれども、お父さんの遺伝子を持っているお子さんですから何をするか分からないという点では、私は信用ならないという風に見ているんです。

それから是非とも言わせて戴きたいのは、この自民党総裁選の党員投票の仕組みをどう捉えるかという点であります。私は自民党の党員として長く活動をしてきました。2015年に自民党の公認として大阪府議会議員選挙に出馬をしました。この番組のメンバーのなかで、自民党の選挙に出ましたよという人は私だけだろうと思うんですけども、この時、その維新が都構想を掲げていた訳です。

その都構想というのは、けしからんという一点で、自民党から公募という形で、大阪府議会議員に出馬をした訳です。これは維新に負けましたけれども、この時、私も候補として、党員集めを必死になってやりました」

水島「うん」

宇山「もう二人、三人、党員を獲得するのがどれだけ大変か。一軒、一軒、戸別訪問していきますね」

水島「うん」

宇山「その中でも政治に関心を持っておられるような方の所を再度、訪ねて行って、党員になって下さい、4千円ですよということで、ご案内しても、それで党員になってくれるような人なんて殆ど居ません」

水島「うん」

宇山「この理由は4千円が惜しい、銭が惜しいということじゃなくて、結局、こういう党に関わるってのが煩わしいということのようですね。こういう形で党員になってくれる人は居ないにも拘らず、今、自民党は年間千人、特に衆議院議員の小選挙区に立っている支部長達に対して千人の党員を獲得せよというノルマを、この間、ずっと課している訳です。

まあ、この千人という形で年間党費を払うという条件で、議員が、党員になって貰うように名義だけ貸して頂戴と、党費については、こちらで全部持ちますよというようなことも、実は横行している訳です。最近では、そんなことをする事務所は無いよというようなことを言っている人が居ますけどね、嘘をつくと。私が知っている限りでも、殆どの議員事務所で党費の肩代わりをして、名前だけ貸して頂戴、だから党員になって頂戴。そんなことは日常茶飯事に起きていることですね。自民党は、この千人のノルマ獲得ということに対して、獲得できない場合は罰則を科すということも…」

一同「(失笑)」

水島「これ、凄いねえ、やっているの？」

宇山「そうです」

水島「それ、初めて聞いた」

宇山「ええ」

水島「ああ～」

宇山「千人に満たない不足党員数について、一人原則2000円の罰金を科すんですよ」

深田「ええ～」

水島「おお。それ凄いね」

宇山「例えば300人しか集められなかった衆院小選挙区の候補は700人、足りませんね。この700人×2000円で140万円の罰金を取る。或いは、比例代表に重複立候補させないというようなこともやっている訳です」

水島「ああ、なるほどねえ」

宇山「仮に一人も党員を獲得ができない場合、1000×2000円ですね」

大井「うん」

宇山「200万円と。まあ、高々議員にとって200万円程度のペナルティなんて知っているかもしれませんが、ここで、どうせ罰金を取られるならば、こちら事務所の方で肩代わりして千人分、年間4千円の党費で400万円ですね。400万円の党費を、こちらで肩代わりしてあげるから、是非、党員になって頂戴というような話になっている訳です。

確かに自分の意志で党費を払って、自民党のことを思って、国家の為を思って頑張って党員活動をしていらっしゃる方も、私は多く知っております」

水島「うん」

宇山「でもね、そうでない人が結構、多いという事実もあるんですよ」

水島「現実にそうでしょうね」

宇山「現実にはそうです。例えば、こういうことがあるんです。千人ですから、かなりの数です。組織ぐるみで党員を獲得しなければなりません。私みたいに一軒、一軒、訪ねて回って党員を獲得するのは到底、到底、千人の数は到達できません。組織ぐるみでやる。例えば、こうです。事務所から、ある会社に、お宅の所で100人、党員名簿を纏めてくれないかという依頼をする訳ですね。その会社とは日頃から色々付き合いがあると。まあ、色々、そういう便宜も取り計らってやっているというようなこともあります。そして、その社長が、社員100人分の名簿を揃えて、議員の事務所に渡す訳ですよ。この時、100人の党費の負担を、こちらでましましょうかと、社長が言った場合でも、いやいや、そこまでして貰ったら申し訳ないので、我々事務所の方で、この100人分、40万円の党費は、ちゃんとさせて戴きますというようなこともある。その議員が肩代わりするというようなことは、こういう形で、しょっちゅう起こっている訳です。

それなら未だいいです。会社程度なら未だいいんだけど、もしこれが、訳の分からない宗教団体とか、訳の分からない政治団体とか、中国なんかと密接に絡んでいるような敵対国と密接に絡んでいるような組織から、はい、纏めて名簿100人下さいというようなことで、この人達が総裁の投票権を持つんですよ」

石田「そういうことか」

宇山「これが非常に重要な訳です」

大井「うん…」

宇山「今、自民党の党員っていうのは110万人ぐらい居るんでしょうか。この110万人の内の、こういう訳の分からない形で党員にして貰った人達が、この総裁選に参加して国会議員票の半分の376票分がある訳ですね。その票を左右するということは由々しきことだと思っているんですよ」

水島「うん。その通りですねえ」

宇山「仮にも自民党の総裁っていうのは、今のところ即日本国の総理な訳ですよ。日本国の

総理を選ぶ選挙で不当な輩が多く入り込んでいるという疑いがあるんじゃないのかと。例えば、この党員獲得で年間1万人を超えるという党員を獲得するような議員も居るんですよ。これ、名前、言ってもいいと思うんですが、例えば、二階幹事長ですよ。或いは、武田良太議員ですよ。1万人を超えているんです」

水島「うん」

宇山「1万人ってね、これ、どうやって集めているんですかと。その手法っていうのは一体、どうなんですかと。おかしい団体かどうかっていうことを、ちゃんと精査して、この党員になって貰っているんですかっていうことが本来、問われなきゃならない訳ですよ。これをメディアは何も報道しません。自民党の議員だって、これについて、おかしいじゃないかということは何も言わないんですよ。

だって、それは党員になったら総裁選で投票できますよっていうことを釣り文句にして、こういう党員を募っているっていうこともあるから、ああ、これでいいんじゃないっていうことになっているけど、我が国の議院内閣制という原則に照らせれば、これは全く原則違反です。本来、民意によって選ばれた国会議員が責任をもって内閣の首班を選ぶというのが主旨なのに実態はそうになってない。

こういう訳の分からない団体が入り込んで来て、そして、今でも総裁選候補の中に日本を害そうとしているんじゃないかというような候補が居ますね。そういう候補に喜んで、うわあっと投票するんです。そして、その結果を歪めていくというようなことを議院内閣制というものの危機であると、私は強く思いますね」

水島「そうですねえ」

宇山「以上です」

石田「ヤバいですね、このシステム」

宇山「そうなんです」

水島「実際、聞いていた皆さんも驚く人が多かったと思うんですけど、今、二階さんの名前が出たでしょう」

宇山「はい」

水島「中国との口利き役が、前は河野洋平だったっていうのが二階さんに替わったんですね。例えば、日中の国際貿易促進会は河野さんがやっていた時、もう20年近く前ですよ。何をやるかって言うと、オムロンとか日立とか環境、日中の環境、まあ事業ですね。企業はみんな、そこへ行かなきゃいけない。まず、そこを通す。中国も、そこを通さないと、絶対に中国で商売させない。こういうようなことを考えるとね。さっきの1万人を集める連中っていうのは何なんかっていうのは、つまり、そういう形でお金も何も全部、繋がって票で買っているということですよ」

宇山「その通りです」

水島「それと、また、それだけ影響力も出るっていうね。こういうことが今、続いていて、この間、二階さんと総務会長が中国へ行きましたけど、あれは次の口利き役、日中間のエージェント、誰になるかっていうようなことで考えた方がいいっていうぐらいね。今のご指摘

で、よく下部構造というかねえ、それまで判って来るっていうねえ。

だから、いかに繋がっているか、そういう外国の勢力とも繋がる可能性があるというのと、自民党にも随分、影響を受けますよね」

宇山「この党の資金源ですからね」

水島「そうですね」

宇山「影響を受けない訳が無いです」

水島「そうですねえ」

宇山「はい」

水島「それと宇山さんが今、冒頭に言ってくれた夫婦別姓の話」

宇山「はい」

水島「これも指摘しておかなきゃいけないのは、別姓になって何が無くなるかって言うと、戸籍もそうですけど皇統です。おっしゃって戴いたように男系男子とかね、こういう流れは夫婦別姓という思想と言うかイデオロギーとは完全にぶつかる、対立する、つまり別姓を進めることは、所謂、皇室の在り方自体を変えようとしている。行き着く先はそこですよ。女系・女性天皇論とかね、こういったところへ行くっていうことも、今、せっかく言ってくれたんでね。だから極めて危険なことが今回の総裁選で今、進められているということでもあります。はい。有難うございます。では、深田さん、お願いします」

深田「有難うございます。宇山先生のお話、大変、勉強になりました。やっぱり党費を肩代わりして党员を集めると、それは会計上、どうなるんだろうっていうのが、私の今の疑問なんです。それって肩代わりした時に、議員の政治団体からお金を出しましたとなると問題ですよ」

宇山「それこそ裏金なんかで処理をする訳でしょ」

深田「ですよ」

宇山「はい」

深田「そう思うと、裏金議員が一番、集まっている高市早苗議員が、ちょっと私は怖いかなと思ったんです。凄く素晴らしいことをおっしゃっているんですよ。ただ彼女は素晴らしい事をおっしゃっているんだけど、何か色々腑に落ちないところもあって、彼女の各論はともかく、ちょっと置いておいて、私は今回、アメリカの大統領選と日本の総裁選を比べて見て思ったのが、やっぱり日本国民は、実は首相を選ぶ権利が無いと。自民党の党员だけということで、先日、韓国人にも馬鹿にされたんですよ。日本より韓国の方がマシだと。私達は自分達のトップを選ぶ権利があるという風に言われて、ああ、確かにそこはそうだなあという風に思ったのが一つあるのと、もう一つは、私も何年間か、自民党の党员だったことがあるんです。その時に投票用紙が来なかったんですよ。何処に行ったんだろうということを思ったことがあるんです（笑）。何故、うちには来ないんだろうかっていうことでモヤモヤしていたんですよ。

あと、そもそも日本国民じゃないと自民党の党员にはなれないはずですが、国籍チェックを

受けていないんです。ということは、私達、国民は選挙で投票する権利があるんですけども、実は総裁選で誰を総裁にするかって外国人が投票しているかも分からないっていうね、これ、よく考えたら怖い国だなあって」

石田「怖いな」

深田「怖くないですか」

石田「まあ、乗っ取られるな」

深田「だって乗っ取られていますよね。何処の国の人か分からない人達の票が集まっていて、しかもパーティ券の裏金が還流して、そのお金で外国人が自民党の党员になっても、それをチェックするシステムが何も無い。それで票が集まる訳ですよ。恐ろしい国だなんて思いました。

あと、アメリカの大統領選を見ていると、2020年の時、あの時の大統領選を見て、アメリカは最悪な国だなと思ったんです。ただ、今、アメリカの大統領選と日本の総裁選を並べると、アメリカの方が真面目な議論が為されている訳ですよ」

小林「うんうん」

深田「まだね、減税をすとか脱炭素をやめるべきだとかいう話をトランプ前大統領がおっしゃったとか、あとはバランスを副大統領候補として指名して労働者の権利についても保守派が語り始めるって非常に重要だと思うんですよ。今の日本ってリベラルも保守派も労働者の権利、働く人の未来をどうするんですかっていう議論が為されて無い訳ですよ。今の総裁選の中で、どうでもいい話はされていますよ。でも働いている国民の給料、どうするのと。

移民が沢山、入って来て、それが賃金を押し下げる要因になっていますよねと。働く国民の給料をどうやって上げましょうっていう議論をされていないんですよ。それが日本の総裁選を見ていて物凄く残念だなんていうところと、減税の話が絶対、出て来ないですし、まあ、茂木さんでしたっけ、林さんでしたっけ、消費税減税するんだったら年金を3割カットだとかね、そんなことまでおっしゃっていて…」

石田「お前らの裏金、カットしろよって話だよねえ」

深田「そう。そうですよ。裏金どころか…」

石田「裏金どころか給料をカット」

深田「彼らの給料を減らさないっていうね、一般庶民の苦勞を一度は知って貰いたっていうのもありますし、苦勞を知らないんだったら知らないでいいんですけど、困っている一般国民の生活のことを、もう少し考えた政策を打ちだして貰いたいということを物凄く思うんですよ。

今回、やっぱり夫婦別姓か否かみたいところで、これにつられて、やっぱり夫婦別姓なんか絶対に駄目だあって思って別の候補を選んだとしても、その裏にある政策は殆ど同じなんです。誰を選んでも増税、誰を選んでも毒注射の漸進で、この国に、私達一般国民の未来が無いっていうところ、それは変わらないんですよ。ですから、どの味の毒を飲むかっていう（苦笑）、この選択肢の中で、こんな中からは選べないよっていう話をする、やはり私のチャンネルのコメント欄の中からも、それでも一番、マシなのを選ぶべきなんだっていうこ

とを言われるんです。

但し、それこそがグローバリストの手口でしょと。全員がグローバリストの手先だよと。その中で誰を選んでも、私達は絶対に幸せになれない。そのからくりが気が付いて、このゲームの基盤から、ひっくり返すっていうことを、国民が考えないと、私達、搾取されて国会議員や日本の政府に搾取されて滅びるんですよって、そこまで気が付いて貰いたいなど、本当に思います。

あとは、今回のアメリカの大統領選で、アメリカ人の政府関係者、官僚に色々と話を聞いてみたんですけど、彼らもハリスならアメリカ終了だと（笑）」

小林「（頷く）（微笑）」

深田「そう思っている人も居て、今、バイデン政権の中で結構、真面目な官僚が何に困っているのかと言うと、やっぱり脱炭素の推進で電力不足な訳です。電力不足で政府のサーバーが実は止まったりしている訳ですよ。データセンターが3日間、止まっているとかね。そういう問題があるんです。アメリカはエネルギー大国ですよ。バージニアでは石炭が馬鹿程、採れるんです。

ところが、やっぱり脱炭素推進で燃やしちゃいけない。じゃあ、燃やしてもいい所で燃やして発電して送電網を引いてデータセンターに繋げましょうっていう話をして、その送電網を引くのに、やっぱりリベラルが反対運動をして送電網を引くことも出来ないってということで、色んな問題が起こっている訳です。こうやって国内で自分達の政府のサーバーを動かすことが出来ない。そこに脱炭素が壁になっている。だから、それをちゃんと覆さないといけないんだっていうことは、アメリカでは未だ官僚がちゃんと話をしているのに、日本は、それが全く話題にもならない」

大井「うん」

深田「ラピダスという2ナノの半導体工場を北海道に造りましょうと。その時に60万キロワットアワー欲しいと。北海道の発電容量って600万キロワットアワーぐらいで、その十分の一をくれと言っている訳ですよ。経産官僚よ、それだけの電気が無いのに何故、そこに誘致したんだと。そういう何か、おかしいことを、ずうっと日本はやっているんですけど、そういう点では、アメリカの方がちょっとマシな部分はあるかなと思っています。

あと、今回、もう一つ、ウィスコンシン州のことですね。激戦州の中でウィスコンシンだけが、ちょっとトランプさんに不利っていうかね、そこまで有利ではないっていうのも、ここに孫正義さんが、ちょっと遠い原因になっているんじゃないかなっていうのがあって、それは孫さんがフォックスコンのCEOのテリー・ゴウ（Terry Gou-郭台銘）、あのシャープを買収したフォックスコンのCEOをトランプさんに紹介して、フォックスコンのCEOが、ウィスコンシン州に莫大な投資をして1万人ぐらいは雇用しますと。だから特別な助成金とか色んな優遇をして欲しいっていう話で、トランプさんがオッケーした訳ですよ。

ところが蓋を開けて見ると、工場を造る気配も全く無い。全然、人を雇用する気配も無い。結局、数百人ぐらしか雇わず、ウィスコンシン州の人達も怒った訳ですよ。だってねえ、彼らの税金から、それなりの投資も成されている訳なのに、それなのに全く何のメリットも無かった訳です。そういうフォックスコンとか浙江財閥に関わって、トランプ前大統領も、そこでペナルティを負っちゃっている訳なんですよ。

だから、そういうのを見たら、ああ、こういうフォックスコンっていう会社とね、やっぱり、日本は関わっちゃいけないんだと。そういう会社に日本の大企業を売ってはいけなかった。日本は、そういう反省をしなければいけないと思いますし、日本は日の丸連合だけでやってきたから半導体っていうのは凋落したんだっていう風説、嘘が流れているんですけども、2009年、産活法という法律が改正されて、それは高市さんが副大臣の時に改正されたんですけども、その時に日台連合で半導体メモリを復活させるっていうことを、経産省は発表しているんです。

エルピーダの技術を台湾に移管しているんですよ。産活法の法律の下で300億円の助成金を支給します。その代わりにエルピーダは日本で製造するのをやめて、台湾に製造を全部、移管しなさいと。ファブレスになりなさいということで製造、移管すると技術が全部、抜けていくんですよ。それで日本はエルピーダという会社を失う訳です。

何故かと言うと、エルピーダのDRAMの類似品って言うと本物ですよ。本物が深圳の闇市場で物凄く安い価格で大量に出て来たからDRAMの価格が暴落して、それでエルピーダは倒産したんですよ。そうやって日本の大事な半導体企業を潰した原因を作った方が、今、その総裁選の候補で何となく保守派の人達にもてはやされている。もてはやされているけれども、その支えている人は裏金議員達っていう、この構造が物凄く不気味だなと、私は感じています」

石田「Xで言っていた、愛国風味のグローバリストになっている」

深田「愛国風味のグローバリスト」

石田「愛国風味のグローバリスト」

水島「風味ね」

深田「風味です。風味なんです（笑）、風味です」

水島「なるほどね」

深田「だって日本企業を潰しているんだったら愛していないじゃないですか。国民の働く場所を奪っている訳ですよ」

石田「うん。でも、なんか愛国者ぶっているもんね」

深田「いや、靖国神社に参拝するだけで愛国者なんですか。そんなの小泉純一郎だってやった訳ですよ」

水島「その通りだね」

深田「（苦笑）」

一同「（笑）」

水島「はい」

深田「はい。有難うございます」

水島「今言った半導体の問題は、その通りですよ。その過去があるってことは、しっかりと見ておかなきゃいけないと思うし、それと、今、ラピダスの問題が出ましたけども、電力の

問題」

深田「はい」

水島「それから水力の問題。水を膨大に使いますから。千歳川の本流と支流をやって1日、2万何千トンかな。ちょっとねえ、20万トンだ、ちょっと判らないけど…」

深田「うん」

水島「これを使うのはいいけども、じゃあ、周辺の農業とか、そういうものの影響というものについては全くやられてない。電気のことも今、深田さんが言った通りで、北海道電力は今、ギリギリでやっているんですね。ところが、そんな十分の一も使う様なものが、本格的に第一工場、第二工場、第三工場が始まったら、あっと言う間に大停電です。今、泊原発は稼働していませんから。それで何を言っているかって言ったら、自然エネルギーでやると言うんですよ。風力と。ちょっと待てと」

小林「うん、うん」

水島「太陽光パネルって普通のところでも3割ぐらいが稼働率です。北海道の冬は雪に閉ざされるような所で、太陽光パネルをやったって駄目ですよ。それと今、風力も全然、進んでいないんでね。大体、そんな安定的なエネルギーじゃないですからね」

小林「うんうん」

水島「こういったようなことが平気で行われて、取り敢えず確か2兆円も使われるんですね」

深田「半導体の製造には自然エネルギーを使えないんですよ」

水島「使えないです」

深田「本当は電流とか電圧が物凄く安定していて、きれいな電気でしかつけれないんです」

水島「そうなんです」

深田「精密機器って全部、そうです」

水島「うん」

深田「それを自然エネルギーでやりたいって言うのは気がふれていますね」

水島「うん。全くその通りでね、どうしてもやるんだったら、それに見合うだけのバックアップの火力発電所が必要になるんですよ。だから、もっと金がかかる。つまり、半導体の基盤だけは今、日本で世界一流だっていうものが、取られるだろうって言われているんですよ。実際、専門家達もみんな言っているのに、進めているんですよ。建設も進めているんですよ。今、本当に電力をどうするんだと」

深田「はい」

水島「何の計画もないですよ。泊原発を稼働するつもり全くないしね」

深田「う～ん」

水島「もう間違いなく失敗するだろう」

深田「熊本のTSMCの工場の周辺で、今年、水田に水を張ろうとしたら、普段よりも水を張るのに物凄く時間がかかったと。水が流れて来る量が少ないとおっしゃる農家さんもいらっしやるんです。最近のTSMCのJASM工場関連の資料を見ていると、これまで、年間400万トン近い地下水を汲み上げるんだと、でも地元の人に配慮して、ちょっと減らしますと。削減しますと言っているんですよ。ところがですよ、ところが、ダムからの水を寄せとか、川の水を寄せとか、地下水から汲み上げる水を減らすっていう風に発表した分、別の所から水を流せっていうことを要求している訳ですよ。

ここはペテンですよ、嘘をついて地元の住民を騙して、あとから地元の水を横取りするということをやるような企業を、やっぱり日本は信用してはいけないと思います」

水島「それで大体、つくっている製品自体は日本の為になってないんだよね」

深田「あれはインテリジェント・ビジョン・センサー向けの半導体工場になるんだろうな、まあ、勿論、それだけじゃないですよ。車載のチップなんかも造ると発表されているんですけども、基本的には監視システム用のシーモスセンサーとICのロジックチップとメモリを貼り合わせたインテリジェント・ビジョン・センサーと呼ばれるものになるんじゃないのかっていうことが言われているんです。

それって何かと言うとね、ソニーのシーモスセンサーがウイグル自治区のウイグルの方々を監視するシーモスのチップ、監視カメラ用のチップを一番、提供しているんです。それよりも、もっとグレードの高いチップ側で、皆さんの顔から特徴っていうものを抽出して一瞬で誰なのかが判るっていう、そういうチップを造る工場を創っている。そして何故かパンデミック条約では、日本がその議長国となっている公衆衛生の監視システムを推進している中に、監視システムの能力を強化するのに先進国が途上国に対して、その能力強化に努めなければならないって書いている訳です。

ということは、その監視システム用のチップなんて日本には余って無いんです。新しく、そこに熊本の工場では、たまたま出来るなんて、そんな変な話はないですから、ということは、熊本の工場で造られるチップって世界監視システム用なんですか、なんていう風に邪推してしまいますよね」

水島「それから、もう一つ、これは解り易く、2ナノっていうのは普通のレベルよりも更にハイレベルの方で、つまり、未だ全然実力も無いのに、突然、ワンランクアップのものを造っちゃうっていうけど、普通の技術者に聞いても無理だって言うんだよね」

深田「うん。幼稚園児が東大を受験するようなもんですよ」

水島「そうだよな、うん」

深田「そもそも2ナノのチップがどれぐらい使えるのかって判らないですし、IBMが開発したものですけれども、そのアメリカ人、ごめんなさい、小林さんはアメリカの方なのに、アメリカが儲かるものを日本にライセンスしてくれるのかっていう(笑)、アメリカだけじゃなくて普通のビジネスマンだったら解ると思うんですけど、儲かる技術を他人にやらせるのかって、ここを冷静に考えようよって思うんです」

水島「いや、そうですよ。だから、結局、日本の持っている基盤を取っちゃうと、日本は全てを失う。お金だけ出すと。2兆円って結構、大きいお金ですからねえ。凄い金を出して、壮大なゼロに終わる可能性がある。或いは、マイナスになる可能性だってあるってね。一番

の問題は、やっぱり政治家もそうですけども、日本の中で官僚の世界でも非常に劣化が起きているっていうことですね。

さっき、大井さんが言った戦後80年のね、本当に全部がもう一回、ガラガラポンでやり直さなきゃいけない。そういう時代が来ているかも分からない。じゃあ、これから、どうしていくかっていうことを皆さんのご意見を伺いましょう。どうしようもないって言われると、終わっちゃうんですけど、そうはいかないので、後半は、これからの未来に向かって、例えば小泉進次郎が、総理になったら、カマラ・ハリスが大統領になったら…」

一同「(笑)」

水島「凄い世界ですよ」

小林「Oh No！」

水島「Oh！Noですけども(笑)」

小林「(笑)」

水島「でもアメリカの中で本当に内戦が始まる可能性がね…」

小林「あります。ある」

水島「世界ナンバーワンの大国で内戦が起きる。ただ意外と、そういうことが想定されているんじゃないかっていうね」

大井「う～ん」

水島「世界のガラガラポンが今、本当にやられるんじゃないかっていうねえ。もう一つ言うと、メディアは報道していませんけど、日本本土でアメリカの中距離核ミサイルの配備を、もう、きちっと準備している。確かに、これは高市さんとか一部の人は、非核三原則の内の『持ち込ませず』を緩めたいとか言っているんでね、これをやるっていうことは本当に東アジアが次は戦場になっていくって可能性があるんですけどね。これも含めて怖い話ですけどねえ、暑い時には、ぞっとする話が涼しくなるかも分かんないのね」

一同「(苦笑)」

水島「はい。後半、そんな感じでやってみたいと思います。有難うございます」

一同「(礼)」

<後半>

水島「はい、後半になりました。後半については色々分析を載いて、これが凄く参考になると思うんですけど、一つですね、あの大統領選のテレビ討論の中で、ちょっと、これは触れておいた方がいいと思うのは、ハリス候補にABCという放送局の司会者が、いかに物凄い偏向で、皆さん、気が付かなかったと思いますけども、トランプが事実を言っていないって言い方している中で、一つは中絶問題ですね。

例えば、こういう風に言った訳ですね。ワルツ副大統領候補が、妊娠9か月の中絶は全然、問題ないと。生まれたあとでも大丈夫だと言ったとトランプが言ったんですね。トランプがこう言ったら、司会のデイビスが生後、赤ちゃんを殺すことが合法とされる州は、この国には無いってトランプ発言を否定したと。これで済ましちゃった訳ですね。

でも、実際、ミネソタ州の中絶指針には、中絶の妊娠期間によっては制限されることがないことが記されていると。従って臨月であっても中絶は制限なく行えることになっていると。因みにワルツが知事に就任した2019年から、ミネソタ州では中絶作業をすり抜けて8人の赤ちゃんが生きたまま生まれてきたが、その内5人には命を救う為の処置は何も施されなかった。残りの3人は痛み止めの処置が施されたものの、それ以上の処理はされずに、全員、亡くなったと。つまり、これでいいって言っている訳ですね。

だから、このワルツさんっていうのは、もうハリスさんを上回る極左って言われているんですけども、こういうような形の中絶問題もね、中でも生まれても殺していいというようなことがあるって、これもね、これから色んなもので日本の場合でも出て来るとも思いますね。このワルツ知事、副大統領候補自身は、これでもいいんだって言っているんですね。

2023年にはワルツ知事によって、ミネソタ州では生存乳児保護規定が削除されたと。中絶が上手くいわずに生きたまま生まれた赤ちゃんには法的な処置を与えることをよしとして、保護を与えるのがいいとしたんだけど、実際にはそうじゃないことがある。こういう保護規定を削除した。つまり生きたまま生まれちゃったら殺してもいいというね。こういうようなことが、このABCの…他にも、実は、明日、ゲストを呼んで収録しますけれども、ああ、はい、宇山さん、どうぞ」

宇山「実は私も大統領選、カマラの嘘が物凄く多かったなということで大変、驚いているんですけどね、具体的にカマラがどういう嘘を言っていたのかというのを、ちょっと纏めてみました」

水島「ああ、いいですね」

宇山「大きな点が3つございます。今、社長がおっしゃったアポーション、この中絶の嘘の問題も大きいですけども、カマラが明らかに嘘デタラメを言っていた第一の点が『トランプ政権は対中貿易戦争を仕掛けて貿易赤字を増大させた』と言った訳ですね。これは全くの嘘です。トランプ政権期の貿易赤字額は6500億ドルで、バイデン政権期には、これが9500億ドルに増大しているんですよ」

水島「じゃあ、1.5倍になったんだ」

宇山「そうなんです。関税の引き上げについても『これはトランプの売上税だ』ということのカマラが言っていましたけども、インフレを通じて『中間層に4千ドルの負担増になる』と。じゃあ、この4千ドルというお金が一体、何処から出て来ているんだと。根拠を示さなかった。本来、ご案内の通り、関税っていうのは、相手側の中国が支払うべきものであってアメリカ側から負担をするということは全く無い訳じゃないですけども、あるのはありますけれども、このインフレ等を通じて4千ドルということの根拠というのは全く無いという点で大デタラメ。

それから3つ目は『トランプ前政権が大恐慌以来の最悪の失業率を残した』と言っておりますけれども、これは2009年10月のリーマンショックのあとには、失業率最大10%に

到達をしているんですね。何故、カマラは、こんな、誰が見ても判るような大嘘を次々と言っていくんだと。ちょっとお話を続けさせて戴きますと、カマラの言っていた経済政策も、私はムチャクチャだと思います。

例えば、不当値上げをした企業に対してはペナルティを科すというようなことを言っていますよね。そんなことをすると、これは統制経済になってしまう訳ですよね」

水島「その通りですね」

宇山「それから貧困層に向けてね、住居を300戸造って、それを分配して分け与えると。住宅を300戸、分け与えると。それは一体、どの財源で、どういう基準で誰に分け与えるのかっていうことが全く解らない。そんなことを政府が率先していいのか。富裕層や大企業に対する増税をするなどというのも統制経済の一種だと思うんです。

それから、先程、シュラー先生の方から出た移民問題のところ、トランプ大統領が、移民が犬、猫を食っているということを言ったというご指摘がありましたけどもね、私は、この件に関しましては本当かもしれません。本当に食っているかもしれません。しかし本当に食っていたとしてもね、やはり、こういうことは言わない方が良かったかなと思います。

それよりも、今迄、バイデン政権で年間300万人もの不法移民が入って来て、これだけの治安が悪化しているということに対して、どうするんだということを正面からですね…」

水島「正面からね」

宇山「きちんと言っていくべきだったし、あと、面白いのはトランプ大統領がこの討論会の2週間ぐらい前でしたでしょうか、ああ、3週間ぐらいなのかな、カマラは一体、いつから黒人になったんだという話を言っていましたよねえ」

大井「(笑)」

一同「(笑)」

宇山「案の定、そのことをABCの司会者から突っ込まれていた訳です。どういうつもりで、こんな話を言ったんだと。トランプ大統領が言うのは、カマラが何になりたいのかということについて、私はとやかく思わないと。これに対して、カマラがこう言った訳です。『この大統領になろうとしている人間が一貫して人種差別ということを、ひけらかして、このアメリカの国家を分断して来たというのはアメリカにとっては悲劇だ』と言った訳です。

それに対してトランプ大統領からは、きちんとした答が無かったんだけど、私は、こういうところでこそ、トランプ大統領が、いやいや、ちょっと待てと。いつ、私が、そういう人種差別で国家を分断しようとしたのだと。そんなことをした覚えは全く無いと。むしろ自分は、合法移民を守る為に不法移民を排除しようとしてきたんだと」

小林「そうそう、そうそう」

宇山「だから、現にヒスパニックとか黒人からも一定層の支持を集めているじゃないかと、むしろ、この300万人もの不法移民を国の中に入れて、そして騒乱を煽って、国家を分断させているのはお前達じゃないかと。本来、こうやって切り返すべきであったと思うんですが、まあ、犬とか猫を食ったという話になっちゃって、これは残念だなという風には思いました」

水島「ちょっと、いいですか。じゃあ、今、せっかく言ってくれたので、一応、調べて確認した訳ですけど、市当局は、池に居た鴨とかアヒルを、やっぱり食っちゃったと。これは確かだと。ただ犬猫に関して言うと、そういう人がYouTubeとかで出て来ているから、そういう証言があったと。ただ確認はされていないということで、でもねえ、やっぱり宇山さんが言うように、敢えて言う必要は無かったっていうかね（笑）」

宇山「そうです（笑）」

水島「そういうことは確かにあったと思うんですけど、事実関係はそういうことで、実際に、押し寄せたハイチの人達が食糧調達として、公園に居た鳥ですね。所謂、アヒルとかを食っちゃったというのは確かだそうです」

小林「うん」

水島「犬猫に関しては、そういうのを見たという証言も映像にありますけど、確認はされていないということですね。まあ、因みに我が国の三味線は昔、猫の皮を使っていたというね」

小林「ね（笑）」

水島「そういうこともあります。ただ、宇山さんが今、おっしゃったみたいな形で、せっかくなら切り返しが上手く出来れば良かったなあって、物足りない感じはしましたよね」

宇山「しました」

水島「はい。シュラーさん、どうぞ」

小林「バイデン政権が新しい仕事を作っているとか何かね、でも、実はアメリカ労働局の方では全てはアメリカ人ではないんですよ。移民です。完璧な移民とか何か。だからアメリカ人の労働者の仕事は減っています。無くなっています」

水島「ああ、そうか、そうか。じゃあ、移民の仕事が増えているんだ」

小林「移民の方で、勿論、もっと安く仕事するところなんかね、そうそう、そう。だから、バイデン政権は普通のアメリカ人の為に全然、役に立ってない。役に立ってない」

水島「ということですね。それと、今、おっしゃって戴いたことと同じように、経済討論で出たのかな。かつては民主党が労働者の党とね、所謂、少数民族とかと言われたけども今、全く逆転しちゃっている」

小林「うん」

水島「つまりディープステイトと言われるような金融資本や武器商人やエネルギーメジャーの巣窟に成り果てたのが民主党であって、今迄のイメージのような、共和党は大資本で民主党は労働者っていう組み分けが、今は全くチェンジしているという意見もありましたね」

小林「うん」

水島「だからアメリカの混乱があるっていうようなことも言われていますけどもね、はい」

山中「今のお話で言いますと、民主党共和党って言うだけではないんですけど、今迄、ずう〜っと民主党を支持して来た黒人層、或いはヒスパニック層、どっちかと言うと、社会的、ワーキング・クラスで底辺というか、ミドルクラスよりちょっと下みたいな人達は、数が多

いですからね。そういう人達プラス移民である人達って、ほぼアジア系も含めて日本人の移民もね、大体、民主党系の人が多いんですよ、カリフォルニア辺りもね」

小林「うんうん、うん」

水島「そうですねえ」

山中「ええ、やっぱり、これは歴史的にそういう背景で、民主党が非常に涵養にというか、どんどん、じゃんじゃん、金を撒いてきたというね、そういう背景があるんですけど、ただ、トランプになった2016年から、彼がやる政策が特に黒人層、ヒスパニック層、アジア系等のマイノリティに対して、税制もそうですし、減税、やっぱり税金が下がるっていうことは一番下の層にいい訳ですから、そしてインフレが無いっていうことで2%台とかね、今、バイデンは8~9%までいった訳ですから、そうすると、こういうことを全部含めて、黒人の男性票は今回16%から二十数パーセントに伸びるって言われているんですね。前回は黒人男性で16%取ったというのは、中々過去の歴代の共和党政権ではないし…」

水島「そうですねえ」

山中「ええ。それが今、倍まで行かないけど黒人男性のトランプへの評価が伸びている。だけど女性はね、黒人女性は、やっぱり無いんですよ、トランプは、そういう人気がない。僕が一言、言いたかったのは、深田さんが非常にいい発言をされて、結局、アメリカ大統領選の比較と日本の総裁選の比較でね、これはパッと見て本当にその通りで、日本は韓国の方が指摘したように、日本は、総理大臣、総裁を選ぶ選挙が無い訳ですよ。自民党員と議員さんしか居ない。

大統領制だと、直接選挙制ですから全てのアメリカ国民が11月5日の選挙日に投票できると。建付けはこうなっていて、それはそうなんだけど、簡単に言うと、二人の民主党と共和党の候補を選ぶ選挙ってというのは、ほぼ全部、各予備選でね…」

水島「州毎にね」

山中「各州でやっていくんだけど、沢山出て来る中、どんどん落ちていくんですが、最終的にそこに残っていく最後の5人10人は、全部、アメリカのドナーっていう物凄い巨額な寄付金を出した人達が推した人しか残れない訳ですよ」

水島「そうですよ」

山中「莫大な金がかかりますのでね」

小林「うん」

山中「だから、共和党にしても民主党にしても、結局のところ一般のアメリカ国民は、その段階からでさえ選べていない。そして彼らが選んだドナー、もう非常に大きな巨額な金をもって影響力を持った、いくつかの大きな団体の代表だったりユダヤ系の団体だったり、そういうところの人達が選んだ人が、特に民主党の場合、最後、残って来て…、だから唯一例外がトランプで、2016年、あの人は自分が超億万長者ですから、そういった人の金をあてにしないで、共和党の予備選を勝ち抜いてきた訳ですよ。

勝った後は、さすがに民主党のヒラリーとの一騎打ちになったので、これは、もう莫大な金が要りますから、そこで寄付する人達もいっぱい入れたんですが。だからねえ、僕はどっち

もどっちと思うんですよ。日本人の場合、総裁選で日本の国民の一人一人が参加できればいいなあと思うけれども、あのアメリカの大統領制でさえ、建付けはそうになっているけど、現実には、そういうところがあるなあと思うんですね」

水島「それは大変、重要な指摘でね、じゃあ、この日本の総裁選が現実になんだと。本当に自民党員が選んでいるかって言ったら、宇山さんの指摘があるように、色んな外国勢力や、そういうものによって影響を与えることは出来る。私が先週か先々週か、こういう言い方したんですよ。米国の支配層は猿山のボスを選ぶ、どの猿を選ぶのかというようなタイトルにしてやったんですね。つまり日本の主権国家というのが、100%全然、なっていないと思っているので、現実には猿山のサルのボス争いをいかにもキーキーやっているようだけでも、現実にはアメリカがオッケーする人間しか総理になれない」

小林「うん」

水島「ちょっとでも反抗したら安倍さんみたいになっちゃう。中川さんみたいになっちゃうとか。こういうような現実を一番、よく解った猿が岸田さんだったというようなことで、誰を選んでも同じだっていう意味は、実は、そういう意味で、アメリカの支配層っていうか、やっぱり、そのところ、まあ、アメリカというよりも、もっと言えばシティの方だっているだろうけども、現実にはそういう大きな力の中で、我々の国の財務省や、役人さんもね、IMFやFRBというような形の影響力の中にあるということも認めなきゃいけない。

その中で、じゃあ、本当にトランプみたいなのが出せるかどうか。おっしゃるようにトランプでさえもユダヤ系の資本には妥協しなきゃいけない。我々は、そういう世界の現実を踏まえなきゃいけないということもあると思うんですね」

小林「うん」

水島「だから、このワシントンっていうのは結局、このワシントンを牛耳っている人達が今、何を考えているかっていうことで、今のままいったら本当に内戦が起こる可能性があるじゃないですか」

小林「うん」

水島「11月の選挙が終わってトランプが負けたら、完璧に刑務所に入れちゃうでしょう」

山中「確かにね」

小林「そう、そうそう、そう」

水島「暗殺しちゃうでしょう。あそこの中で病死したっていう形でね。というようなことを具体的に考えると、もしトランプが生き延びたとしても、相変わらず暗殺の危険は続きますよねえ」

小林「アメリカを見ていると、アメリカの右派の方が法律どおりでやる。憲法どおりでやる。それで民主党の左の方はそうではない。どんなことでも色々なことをやる」

水島「うん」

小林「違反のことでありますから、だからアメリカ右派は本当に我慢している。でも、いつそれが限界に来るか」

水島「いや、そこですよ。伊藤貫さんの証言によれば、オバマ政権は、2千人の大統領暗殺命令を出して実行しているっていうね」

小林「うんうん」

水島「キラリーって言ってね、ヒラリーではなくてキラの方のねっていうぐらい、現実的には勿論、プーチンもやっているでしょうけども、色んな意味で厳しい見えない戦争が行われてきているというね」

小林「いや、行っています」

水島「やっぱり実際にはねえ」

小林「うん」

水島「ここに出演した長尾元衆議院議員が言っていましたけど、安倍さんが亡くなってから、正直、みんな、ビビりまくっていますと（失笑）」

小林「うんうん、うん」

水島「解っているんですよ。単なるテロで変な奴が安倍さんを殺したんじゃないっていうね。みんなが気付いているというようなことも含めて、また今回の暗殺未遂ですよ。さっき、ちょっと、おっしゃっていたようにゴルフ場でやることは急に決めているらしいから、内部で今日の計画っていうのを教えた奴が居るっていうことですよ」

小林「うん」

水島「それは、さっき言ったシークレットサービスとかね」

小林「そう」

水島「色んな意味でFBIとか、何処からも信用できないっていうね。だから、トランプが、シークレットサービス、有難う。君たちは良くやってくれたっていうのも皮肉かも分からないっていうね、アイロニカルな意味かも分からないっていうね」

小林「(笑)」

水島「そういう気もするぐらいでね、本当に、そういう人を抹殺するっていうことが当たり前のことになっているにも拘らず、日本の政治の世界は血みどろの戦いをしていないですよ」

小林「うん」

水島「まあ、変な言い方だけどね。血みどろになっても戦う政治家が居ないっていうこともあると思うんですけど。皆さんにイスラエルの話も意見を伺ってみたいんですけども、石田さんね」

石田「うん」

水島「今回、フーシ派が撃ち込みました」

石田「フーシ派が」

水島「それはそれで、単なるいつもやる普通のイスラエル攻撃かなっていう風に捉えているんですけど、当人達は極超音速ミサイルを使ったと」

石田「発表していますね」

水島「言っていますねえ、それで公式に言っている」

石田「うん」

水島「本当かどうか未だ判らないって言うんですけど、少なくともイスラエルは最初は空き地に着弾したって言っていたんだけど、そのあと、実は迎撃で破壊して破片が空き地に落ちて火災を起こしている」と

石田「うん」

水島「こう言い換えているんですね」

石田「うん」

水島「これ、イスラエルの状況は、ウクライナと同じように大統領選にも大きく影響すると思うんですけどね」

石田「うん。うん」

水島「石田さん、今の状況は、どんどん殺しているでしょ」

石田「はい」

水島「ガザでね」

石田「うん」

水島「中東情勢をどんな感じで見えていますか」

石田「まずねえ、もうイスラエルは孤立化していますね、あの地域で周りが全部、イスラエルに対して強い非難声明を出しているんですよ」

水島「はい」

石田「今回、フーシ派がイスラエルに対して極超音速ミサイルを撃ったっていうのを発表しているんですけど、まあ、今回は威嚇なんですね。その前に、この今回の日本のマスコミの報道っていうのをいくつか見たんですけど『反政府勢力、フーシ派がイスラエルに対して極超音速ミサイルを撃った』という記事が殆どですね。

反政府勢力フーシ派っていう書き方が、やっぱりアメリカとかワシントンからの完璧なプロパガンダであって、現地に行くと、一応、イエメンの正式な政府はフーシ派っていうことになっているんですよ」

水島「えっ、ということは、最初に報道されたようにイエメンから撃たれたっていうことで、別にフーシ派が、よく言われているテロリストやゲリラじゃないんですね」

石田「じゃないです。イエメン人の認識としては多くの方が正式な政府だと思っています」

水島「あ、そうなんだ」

石田「4月にサウジアラビアに行ったんですけど、その時にサウジアラビアのジェッダっていう町にはイエメン人が沢山、住んでいて、彼らは現地で色々個人商店をやっているんですね。今のイエメンが、どういう状況なのか。フーシ派をサポートするのか暫定政権をサポートするのかっていうと、大体、多くの人がフーシ派ですよ。イエメン人の知り合いが大阪に住んでいますけど、彼はイエメン・コーヒーを輸入して売っているんですね」

水島「はい」

石田「お兄さんがイエメンでコーヒー農園やっているんですけど、彼から毎日、色んな情報を貰っていて、今、イエメンの都市、サヌア（Sana'a）という所は、もうフーシ派が支配しているエリアですけど、そこの方が安心安全で…」

水島「(笑)」

石田「真面に暮らせるから、みんな、サヌアに集まっているっていう状態ですね」

水島「ああ～」

石田「フーシ派が支配しているエリアにイエメン人が自ら集まって来て、そこで生活をしているっていう感じですよ。これは暫定政府の方が汚職とか賄賂も酷くて。結局、国民の為に何もなっていないから、でも、その一方でフーシ派というのは国民をサポートしているので」

水島「うん、うん」

石田「今、イエメンでは結構、多くの国民がフーシ派をサポートしていて、首都を支配して、そこに国民は集まって来ているという、まあ、言ってみれば…」

水島「ということは反政府勢力じゃないんだ」

石田「反政府じゃなくて、向こうの認識としてはイエメンを代表する政府です」

水島「うん、なるほどね」

石田「これ、サウジアラビアの人も言っていたし、イエメン人も言っていたし、日本に住んでいるイエメン人もそう言っています」

水島「ああ、なるほどねえ」

石田「でも、いまだに日本のマスコミが報道しているのは『反政府勢力フーシ派』ですよ」

水島「うん」

小林「ああ～」

水島「そうですね」

石田「反政府勢力じゃなくて、一応、正式な政府という認識の方が強いというのが、実際の現地の状況ですね」

水島「なるほどねえ。それは大事な指摘ですよ」

石田「そう」

水島「そういうところがミサイルを撃ったってことですね」

石田「そうですね」

水島「う～ん」

石田「あと、バブ・エル・マンデブ海峡という南の海峡も、今、フーシ派があつた辺りを支配しているんですよ。実際、あそこを封鎖している状態で、イスラエルに向かうオイルタンカーとかコンテナ船は全部止めますよと。一応、警告を出している訳ですね」

水島「うん」

石田「一応、警告を出すんだけど、その中で警告を聞かずに、ぐんぐん突き進む船なんかもある訳ですよ。そこに一応、注意喚起をするけども、それでも行っちゃう船をフーシ派が攻撃しているんですけど、それに関しても日本のマスコミは、アメリカ側の発表というニュースをそのまま報道しているので、だから結局、フーシ派が何か凄く攻撃的みたいですが、いやいや攻撃的なのはフーシ派ではなくてイスラエルですよ、みたいなね」

水島「うん」

石田「まだまだ、やっぱりイスラエル寄りの報道っていうのが日本の主流メディアだなあって思うんですよね」

水島「それは本当にその通りだと思うし…」

石田「実際ねえ、ハマスも勿論、テロリストですけど、今の第6次ネタニヤフ内閣は、その何倍もの、かなり残忍なテロリストですよ」

水島「うん」

大井「だからイスラエルのネタニヤフ首相は、ジェノサイドで国際裁判に引っ張られるぐらいに…」

小林「ああ、そうね」

石田「もう、そうですね」

大井「指名手配じゃないんですけども、名指しでジェノサイドしているって、はっきり言われてますよね」

石田「そうですね。多くのイスラエル人も、それを言っているんですよ」

大井「言っている」

石田「それで今の政権を引きずり降ろそうとして、顔写真を掲げて退陣デモとかをやっているんですね」

小林「結構、テルアビブで、本当に、いっぱい出ているね」

石田「いっぱい出ています」

小林「う～ん。ね。それでイスラエルの方も人が逃げているんですよ」

石田「ああ、だからブレイン・ドレインでしょ」

小林「ブレイン・ドレイン。英語でBrainは脳、Drainは、そのう…」

石田「頭脳流出でしょ」

水島「あそこから去っている訳だ」

小林「900万人の人口で、1年間で大体50万人が逃げているんですよ」

水島「ああ、う～ん…」

小林「これは結構、技術者とか頭のいい人とか金がある人とか、一番、上の人達ですよ」

石田「そう。ブレインの方がお金を持っているからね」

小林「そうそう、そう」

石田「だから、そういうテクノロジーの上の方に居る人は、もう、みんな、ねえ…」

小林「イスラムはねえ、あと紅海の港、イラクの方の港も、もうクローズ、閉鎖しているよ。もう動いていない」

石田「ああ～」

小林「だから船は、もう入れないから」

石田「そうですね」

水島「ああ、なるほどねえ」

石田「そうになるとね、イスラエルに石油が供給される港って3つあるんですけど、レバノン国境に近い所と真ん中のアシュケロン港と、マックさんがおっしゃった南の紅海の出口の所ね。南は動いていないでしょ」

小林「動いてない」

石田「北もヒズボラからの攻撃があるので止めているんですよ」

水島「うん」

石田「そうになると真ん中のアシュケロン港に今、イスラエルに運ばれる原油は、ほぼ、そこに100%入って来ているので」

山中「大抵、トルコですか。メイン、トルコから」

石田「トルコ経由でバクー油田から運ばれて来るんですね。ただトルコは一応、全ての物品に関して、イスラエルとの貿易は禁止していることを言っているのですから、これが果たしてトルコ経由で原油を入れられるのかなっていうね、僕は、ここを凄く疑問に思っている訳ですけど、今のところ行っているみたいですね」

水島「まあアメリカのメジャーがあるからね。そうやって何かやっちゃっているんでしょう

ねえ」

石田「そうですね」

水島「真ん中でねえ、というような状態ですよねえ」

石田「だから結構、崖っぷちだと思いますよ」

水島「崖っぷちだよねえ」

石田「うん」

水島「我々から見るとね。だから、あの強硬な態度っていうか、はっきり言うと、みんな、理由をつけているじゃないですか。あそこにハマスの幹部が居たから、学校でも病院でも、何処でもやって」

小林「ハマスは全然、損害なく、まあ損害になっているけど、ハマス大隊、本当は完璧に潰しているのは3つしかない」

水島「ほお」

小林「でも奴らの方は、もっと増えているんですよ。ハマスの方、人が増えているんですよ」

石田「それは増えますよねえ。あんだけ、そんな…」

水島「ひどいことになったら…」

石田「俺もハマスになるんだあ～って言って」

小林「ね、そのハマスの方に、そういう成功していないのに、また完璧に180度でヒズボラの方に攻撃しようと、レバノンにしようとすると、これは軍事価格、まあ、あるんですよ、軍事価格。はっきり言って無駄ですよ。本当に無駄ですよ」

石田「う～ん」

水島「いや、だからね、この問題で言うと、ネタニヤフは何処までやるつもりだったかっていうね」

石田「いや、でも、とことん行くんじゃないんですか」

水島「そうなんだよ、だから…」

石田「だから、もう戦争を続けるか逮捕されるかどっちかですもん。逮捕されたくないだろうから」

水島「だからイランまで行きたいんだらうっていうねえ」

石田「ええ、行きたいでしょうね」

山中「あとアメリカを引き込むと、これがあります」

石田「そうそう、そうそう、そう」

水島「宇山さん、どうぞ」

宇山「私も6月にサウジアラビアに行きまして取材を致しました。その時に、カズさんがおっしゃった通り、イエメンのフーシ派の人達が、これこそが我々の正式な政府であるという人が圧倒的多数でした」

水島「なるほどね」

宇山「特にジェッダでは、私がインタビューをした人達は確かに殆どがそういう言い方をしておりました。で、先程の水島社長の問いなんですけども、このフーシ派が、イスラエルを攻撃したことをどう見るかなんですけども、私は、あのフーシの攻撃は、イランの後ろ盾があったものではないと。やはり、フーシ単独でやった可能性が高いのではないかなと見ています。今迄、フーシは、かなりイランと連携していた部分があるんですが、この6月28日に行われました、イランの大統領選でペゼシュキアン新政権が出来まして、私もこの時、イランに行っていた訳ですけども、大分、状況が変わって来ていると。現地では、今迄のようにフーシやヒズボラと連携して行け行けどんどんというような形のムードでは全く無いんですね」

水島「うんうん」

宇山「むしろ、これはハメネイ体制の方も、ペゼシュキアンさんに対しては穏健路線で経済制裁を解除するというのが、まずイランを救う第一の道だと。これ程、経済がガタガタになっていて、もう続かないという認識を、最高指導者も大統領も持っているという状況の中で、この前、イスマール・ハニーヤがテヘランで殺されましたけれども、しかしイランは報復をしないといいながら、未だ報復しておりません」

水島「そうですね」

宇山「これは何故かと言うと、やはり直ぐにアメリカがイランの関係者と交渉に当たって、まあ、ちょっと待てと。ちょっと待ってくれと。自分達も然るべき外交の交渉カードを切るから待ってくれということで、イランを抑えていると。そしてイランも、じゃあ、待ってやる代わりに、それ相応のものをくれよということで、アメリカとの水面下の話し合いというのが進んでいると。そうすると、今、浮足立って孤立しているのはイスラエルだけなんです」

水島「うん」

宇山「イスラエルがバイデン政権からも、もうやめてくれと言って抑えにかかっているのに、それでも、あのよう暴走すると」

小林「うん」

宇山「このベングビールやスモトリッチのような強硬派が居る限り、ネタニヤフは暴走をやめることが出来ないんだろうというように思います」

水島「そうですね。日本の場合、上川さんは殆どネタニヤフ政権を支持ですよ」

石田「そうです」

宇山「(頷く)」

水島「何の疑問も呈してない」

一同「うん」

水島「心配もしていないと」

小林「うん」

水島「平和を望むとは言っているけど、基本的にベツタリですよ」

小林「うんうん」

水島「極めて危険な話でね」

小林「うん」

水島「中東の人達が今、そういう状態になっているのに、エネルギーを供給する人達がね、そういう国が、そういう状態になっているというのに…、これ、何なんでしょうねえ。本当に…」

宇山「まあ、一言で言うと対米従属ですよ」

水島「いや、それだけなんだよねえ」

宇山「うん」

小林「イメージとしてアメリカの同盟国だから支持したんですよ」

水島「そうなんです。それもバイデン政権というね」

小林「バイデン政権の詳しい事を知らないからね、でも…」

水島「馬鹿ってことですね（笑）」

一同「（苦笑）」

小林「馬鹿です」

石田「ウルトラ・デラックス馬鹿ですよ」

水島「そうなんだよねえ」

一同「（失笑）」

山中「だから、今回の総裁選で11人が出た時、6人が二世、三世で、あの時は、4人だから5人がハーバード留学組。ケネディ・スクールっていうね、まあ、僕も昔、ニューヨークに居た時、ハーバード・ケネディスクールの人達と一緒に働きましたけどね、本人達が言っていたのは、日本人はハーバードとケネディが二つくつつくとね、とんでもなく素晴らしいと思うけど、全然、そんなことないんだと（笑）」

一同「（笑）」

山中「どのぐらい、あまり、しょうもないかっていうような話をね（笑）」

一同「（笑）」

山中「大分、裏の話を聞きましたんでね」

水島「ああ、それだけの話でね」

山中「ええ（笑）」

水島「この間、元TBSの山口さんがここで収録した時、小泉さんはCSIS始まって以来の馬鹿っていうので、日本人が色々来たけど、こんな奴は一人も居なかったって。デラックス馬鹿っていうのがあったけど、そういう見方も大事ですよ」

山中「そうなんです。だからね、あの中で、ほぼ大半は優秀な人だと思うんですけど、でも、日本から来る外務省だ、財務省だ、そういった所から来る人達は、やっぱり、政府だということ、かなり下駄を履いて入って来ますから」

水島「ああ、なるほどね」

山中「民間の方では訳の分からない人は入ってない、そういう人達は入るのも遥かに難しいけど、政府だっていうこと、あと、大企業ね、こういうところで、例えばトヨタが物凄いお金を投資して研究所を創ったりしているとかあると、シカゴ大学とかそうですけど」

水島「うん」

山中「ポッとトヨタから来るとですね（笑）」

水島「なるほどね」

山中「それで研究所に入れちゃうとかね」

水島「ああ、入れちゃうっていうねえ」

山中「ええ。そういうのがあるんですよ。まあ、何処にでもあるんだと思うけど」

石田「上川さんとかは、アメリカについていけば盤石だとか思っているんですかねえ」

水島「うん、もう信じ切っていますね。あの人は100%、そういう感じがしますね」

石田「この泉さんの本、送った方がいいですよ」

山中「ちょっと読んで貰いましょうか（笑）」

石田「読ませた方がいいみたい」

一同「（笑）」

水島「いや、ほんと、そうですね。もう一つは、例えば、今、売り物になっている、龍じゃない、龍、なんとか、えーと、なんでしたっけ、あの人は若手の総裁候補で…」

山中「あ、小林」

水島「ああ、小林さんか」

石田「コバホーク」

山中「コバホーク」

水島「ああ、コバホークか、龍じゃないわ」

石田「鷹だった」

水島「コバホークだって一応、常に経歴に入れているのはハーバード。所謂、東大を出て、財務省に入ってから、財務省からハーバードへ行ってというねえ」

石田「うん」

水島「まあ、その下駄、履いたかどうかはともかく、なんとなく、そういうのはリアルな感じでやってきますけど」

石田「コバホークは一応、外交政策はブリッジとか言っていますね。アメリカ一辺倒はヤバいからグローバルサウスの国々ともちゃんと関係をつくろうって。そこをブリッジで橋渡しをするみたいな…」

水島「ああ、そうですねえ」

石田「だから、一応、そんなことを言っていますけどね」

水島「だから、どのぐらいね、そういう意図を受けて、高市票減らしの一つっていう話もあるんでね」

石田「う～ん」

水島「青山さんが出たら、まあ、出られなかったんですけど、あれもね、結果としては高市票減らしとか言われていたんですけども、でも、今言った様に、そういう戦後80年の転換を図っている人が居ないっていうのと、石田さんは特に中東に対して関わっているから、エネルギーの問題とエネルギーのことを色々言っているけど、一番危険な状態の中にあるのね…」

石田「そうですね」

水島「この総裁候補達は…」

石田「全く出て来ないですねえ」

水島「全然、言っていないんですね」

石田「言っていないですねえ。だから、結局、石油が断たれて、もう、しょうがないような状況に今、近づいている訳ですよ」

水島「う～ん、いや、だから極めてニヒルで投げやりな状態」

石田「う～ん」

水島「精神的なものを感じるんですけど、深田さん、一番、若い世代になるんですけども」

深田「(笑)」

水島「こういう感覚って言うのは、深田さんから見てどうですか」

深田「正気の沙汰とは思えないですよ。自分の国の政府が、これだけ中東問題が拗れていたから、リスクヘッジの為に何をしなければならないのかと、普通、考える訳ですよ」

水島「それぞれが意見は言うはずだよな」

深田「そう。でもエネルギー問題について、ほぼ話をしないんです。太陽光パネルなのか、原発なのかっていう話をしているだけで…」

水島「そうです」

深田「いやいやメインの火力、今、日本では7割以上が火力で動いているのであるから、化石燃料をどのように担保するかっていう現実的な話をしないとイケない訳ですよ。それが全く土壌に出て来ないっていうのは、日本の怖いホラーですよな」

水島「うん。うん」

深田「何故、脱炭素の中で太陽光パネルなのか、原発なのかっていう話になると、どちらも利権がついているんですよ。この太陽光パネルっていうのは神奈川県連系ですよな。菅さんや二階さんが懇意にしていた銀座のフィクサーが太陽光パネル利権を総括していたので、それにぶら下がっている小泉さんとか河野さんが太陽光パネルを推している。まあ、小池さんとかね。そういう人達は太陽光パネル利権派と。

原発推進派っていうのは原発利権ですよな。核廃棄物というか、そういうものを何処に処理場を造るのかで、それはそれで利権屋さんが居るんですよ。それぞれの利権に紐づいたことしか推進せず、私達は今、火力に依存して生きているんだよと」

水島「うん」

深田「その現実を何故、無視するんですかっていうことを野党すら話題にしないっていうのが、この国のホラーです。その中で、やっぱり中国口ゴ問題ですよな。この中国口ゴ問題って結局、その裏に自然エネルギー財団っていう孫さんの財団があるんですけども、じゃあ、日本は、どうして、今、原発半分以上が止まっちゃっているのかって言うと、2011年の事故で原発は危ないっていうことで、孫さんが自然エネルギーを推進しようとして、原発反対運動を始めたんですよ。その時に中国口ゴ問題の国家电网が創り出した団体があるんですけど、グローバル・エネルギー・インターコネクション（GEIDCO）という団体がある訳ですけど、そこはグローバル・スーパーグリッドという世界中を中国の送電網で繋ぎましようっていう中国送電利権のアジア支部が自然エネルギー財団な訳です。

その孫さんは日本で原発反対運動を推進し、東日本は殆ど原発が止まっていて東日本は電力が足りないんですよ。今でもピーク需要の時は東日本っていうのは工場を持ち回りで止めている訳ですよ。それぐらい日本で今、電力が足りないのに、原発を稼働させるのがスムーズに動いていない訳です。

それどころか火力に対して、もっと投資をすればいいのに、日本政府は、それすら推進していないんですよ。その孫さんも困ったことがあって、最近、生成AIブームですよな。この生成AIでAIを推進するのにAIデータセンターを創ろうと」

水島「そうなんだよな」

深田「北海道に造りましようっていう時に、そこにデータセンターの設計チームがアメリカから来ているんですけど、そのアメリカのコンサルタントが石炭は無いのかと（笑）。何故、日本は石炭が無いんだという事を、孫さんに言ったらしいんですよな。それで、また、

電力が足りないんです。

今度は孫さんの考えているA I データセンターも何十万キロワットアワーっていうラピダス級の電力が欲しいって言っていて、また北海道の発電容量全体の1割ぐらい使いたいみたいな話をしている訳です。本当に無いんですよ。何故、ないのかって言うと、孫さんが太陽光パネルを推進し、原発を止めているからですよ。その象徴として中国ロゴ問題っていうのが日本で問題になっているんですけど、結局、孫さんは北海道で電力が足りないっていうことを、どう解決しようかって考えたかって言うと、今度は原発推進で、今、ロビイングしているんです」

一同「う～ん」

大井「めちゃくちゃ（失笑）」

深田「こんなね…」

石田「手のひらを返したような感じ…」

深田「そうです」

水島「いやいや」

深田「迷惑です。私達、日本国民は迷惑です。でも、そういう大企業のお金持ちの話しか聞かない我が国の国会議員とかね、政党、与党も野党もそうですけど、我が国の政権が国民にとって大迷惑ですよ。エネルギー問題を解決する気が無い。利権をつくる気しかない」

石田「うん」

深田「日本国民は、電気が足りなくて工場を止めなきゃいけないっていう自体まで陥っているのに、そっちは無視で孫さんのA I データセンターとかラピダスの工場に必要な電力をどうするのかとか、そっちしか考えないんですかっていうことに対しては、物凄く怒りは…」

石田「ほんと、いい迷惑ですよ」

深田「そうですよねえ」

水島「いや、ほんと、そうですよ」

深田「私達の未来を奪っている訳ですよ」

石田「そんなことしながら…」

山中「アメリカでも同じことが起きていますからね（失笑）」

小林「うん」

深田「起きていますよね」

山中「バイデン政権で全部、化石燃料のパイプラインを止めましたからね」

深田「はい」

山中「それで世界中のガソリン価格が一気に上がった」

深田「はい」

山中「アメリカ人の生活が一気に下降している。もうインフレが起きた。もう日本は同じ道を歩いていますね」

石田「同じですよ」

小林「同じですね」

深田「同じです」

石田「そんなことをしながらロシアへの制裁をやって、石油とか止めちゃっているから」

深田「ほんとですよ（苦笑）」

石田「ロシアから北海道に石油を運んで来ればいい話ですけど」

小林「前、石油は1割ぐらいあったでしょ」

深田「ありました。今は来ないです」

水島「そうでしたね」

小林「ね、だって…」

水島「それとね、北海道のお医者さんと前に話したんだけど、樺太から天然ガスを」

石田「そうそう」

水島「宗谷海峡に生パイプ、40キロですよ。あれをやれば石狩平野の火力発電所まで持ってくれば一応、色々付け加えるだろうけど、四分の一の生天然ガスが供給される」

石田「そうそう、そう」

水島「北海道は勿論、火力ですよ。圧倒的に安い電気で、産業というか企業が押しかけるぐらいになるって言っているんですよ。それは絶対にやらない。対ロシアっていうことでね。これ、アメリカの命令もあるんだろうけどもね」

石田「うん」

小林「うん」

水島「番組に出ている藤さんと一緒に、以前、挫折した、サハリンって言っているけど、樺太と宗谷海峡の生パイプラインを、もう一回、復活できないかって、本当に生パイプで宗谷から石狩平野まで…」

石田「そうなんですよ」

水島「降雪が無くなってね、暖かくなって、この辺が本当に大変なプラスになるんですよ。もう一回、北海道を再生できるっていうね」

石田「そうそう、そう」

小林「うん」

深田「うん」

水島「つまり、今、深田さんが言った様に、電気が無ければ本当に何も出来ないんですよ」

小林「アメリカのC I Aが何か勉強したんだけど、もし、アメリカ全土で電気が無くなったら1年で9割の人口が死にます」

水島「そうですねえ」

小林「そういう研究をしているんです。私は、もう一つ、みんなが考えていないけれど、教育。技術者。アメリカは技術者をつくっていないんですよ」

水島「そうですよ」

小林「それで、今、そういう電気システムを守るとか、色々整備するとか必要でしょう。これが将来、もう出来ないんですよ」

深田「うん」

水島「いや、そうなんです」

小林「色々技術者が、アメリカで少なくなっているから、科学者も自分の国、中国とか何かインドに戻っているんですよ。段々アメリカは、それで電気なんか、流れて無いかもしれない」

水島「そうですよねえ」

小林「ほんとに」

大井「でもアメリカの場合、さっき深田さんがおっしゃったように生成A Iで、またトランプになれば、そのトランプが石油産業を復活させてエネルギーを、そういうA I生成の新しい産業構造に持っていく為に、沢山、データセンターを建てるといいうインフラ整備の、そういう投資が動き出そうとしていますね」

水島「ですよねえ」

大井「それで、おっしゃるように電力も要るし、水も大量の水が要りますので、そういうものも含めて新しい産業構造に移行するといいうプランがある」

水島「あるんですよね」

大井「ええ、あります。だからアメリカはそういう風に、まあ、トランプが、もしトランプになっていけばというビジョンはある訳ですよね」

水島「はい」

小林「うん」

大井「こうやって復活するぞと。その為に製造業を国内に戻して行って新しい次元で、また、復活させて国民経済をもう一回、作り直すといいう計画がある訳ですね。だけど、日本の場合、多分、石油をアメリカから買うぐらいしか…」

水島「高いけどね、うん」

大井「今の状況だとなし、その原発村みたいな、勿論、凄い利権があって、高市さんが、小型原子炉ですか、何かああいうことを言っているけど、やっぱり中性子が漏れて来るとか色々未だ目に見えない凄いいリスクがあるのに色んなことを言うから（笑）」

水島「うん」

大井「本当にそうかなっていう」

水島「いや、ぶち上げることはいいんだけどね」

大井「恐ろしくなります」

水島「既存の原発とか、本当はそれをやるだけで全然、違う訳ですよ。おっしゃるようにプランが無いからね。思い付きで、じゃあ、小型にしたらいいでしょとか」

大井「うん」

水島「そういう感じでね、実は、我々がエネルギー問題で討論やっているなかで出たのは、二つあるんですね。一つは地熱発電」

大井「うん」

水島「これはインフラの料金は凄いいお金がかかるけども、やれば半永久的に安定的に出来る。地熱は日本にとって凄いい有利だっていうね、ただ、目先の金だけじゃいけないので、結構、沢山の金を使って安定的な地熱発電所を造らなきゃいけない。これが一つと。水力は、水の専門家の方だったけど、ダムを1メートル嵩上げするだけで、これも圧倒的に電力量を20%ぐらい上げることが出来る。

それと、もう一つは水素発電で言うと、水は沢山ある訳だから、そのダムを使って横に一基、大体300億ぐらいかかるって言うんですけどね。水の電気分解」

大井「うん」

水島「電気分解をやって、水力発電を無限にやるから、ずう〜っと、お金がかかかないから、その横に電気分解させて水素を作る。無限に作れる。水素って今、高いですから、これも安くやれば、日本の水というもののエネルギーを使う。実に自然のエネルギーなんでね。それこそ別に炭素を出すからっていうことじゃなくてもね、そういう意味で自然に日本の使えることも結構、あるっていうんだよね。こういうビジョンは出ないんですよ」

小林「うん」

水島「本当に具体的にやれば色々出来る。1メートル嵩上げする、ダムを上げるっていうのは、そんなに難しくないって言うんですね。それから、さっき言った水力発電の電気を使って水の電気分解で水素をつくるっていうことも、これも一基300億ぐらいずつダム毎にかかりますけど、やろうと思えばできるんだというような話とかね、前向きな話が凄いい出ているんですね」

大井「うん」

水島「昔、思い出すのは電磁波兵器。5〜6年前、用田さんっていう陸将が言っていたけど、今、日本は最高にいいんですよと。三菱電機がやった。ところが、もう全部、取られちゃっ

たって」

大井「ああ」

水島「アメリカにね、もう無理も無いんだけども、脅かされたら渡すしか無いんだけども、それと、もう一つ言うとね、これは実現するかどうか判りませんが、1分かからないで車の電気を充電するというのも、この技術で作れる」

小林「ふんふん」

水島「今、電気自動車の問題が色々ありますけどね、こういうようなことで、本当に希望はある」

大井「うん、ある」

水島「色々日本は希望があるんだけども…、それと原発の技術者も今、どんどん減っています」

小林「う～ん」

水島「扱える人達が居なくなっている」

小林「うん」

水島「今、原発を動かしたことが無い技術者が今、休電中の原発で働いている」

小林「うん」

大井「うん」

小林「うんうん、うんうん」

水島「これは実際、ちょっと怖いですよ。経験者が居なくなっているっていうねえ」

小林「うん」

水島「もう先のことを何にも考えていないっていう様な事ですけども、さあ、大統領選のね、さっき冒頭に言ったホラーですけどね」

小林「うん」

大井「うん」

水島「ハリスになると、ワシントンは一体、どうですか」

小林「いや、もうアメリカは崩壊ですよ。来月、日本で Civil War って映画が出て来ますよ」

水島「ああ、そうですか」

小林「アメリカでは、もう半年前ぐらい前に上映して、その中で、ある訳がないけど、テキサスとカリフォルニアが組んでワシントンに攻撃するとか何かね」

水島「ああ、一種の南北戦争ですか」

小林「南北戦争じゃないけれど、ちょっとそれをフィクションとしたような…、でも本当にアメリカも、私も意味の話をしているけど、大都市対田舎。左が大都市。これは国にならない。国にならないですよ。ボストンからワシントンDCとかシカゴ。そしてサンフランシスコからロスとか、それぐらいがリブロで左。

でも、あとは真ん中の方が大体、保守っていうか、一応、真面に出来るかもしれないけど、40年前からアメリカの教育は本当に悪くなっているんですよ」

水島「うん。ということは…」

小林「LGBTとか、あとはマイノリティな話ばかり」

水島「うん」

小林「数学とか科学も教えないんです」

大井「う～ん」

小林「教えない。何故か。白人が考えたから、これは良くないとか、そういうようなことで、技術者も出来なくなるね」

水島「う～ん。ということは、ハリス大統領になると一種の内戦みたいなね」

小林「もう、なっちゃいますよ」

水島「内戦みたいなことが起こると。所謂、州毎に分離独立じゃないけれども。連合するとかね」

小林「あと、これも言うんですよ。アメリカン・ナポレオン。ナポレオン、昔のフランスのナポレオンみたいに何処か軍将軍が、もう支配を取ろうと」

水島「ああ、なるほど」

小林「今迄のアメリカの歴史で、実はニクソン時代もあったんですよ。第82空挺師団の将軍が考えていたんですよ。ワシントンまで行こうと思って、政府を盗ろうっていう」

水島「ああ、一種のクーデターみたいな感じですか」

小林「うん。考えたけど、その時は軍将軍達はやめた」

水島「うん」

小林「これはアメリカン・スタイルじゃないって。でも、もう今は、そうじゃないかもしれない。だからオバマが大統領になった時に、軍人の将軍とか196人をクビ」

水島「なるほどねえ」

小林「クビにしたんですよ。やっぱり国が壊れるから、でも壊れるように、今はもう大災害になっていますよ。今の形は、もう国にならないです」

水島「う～ん、それを心配している将軍達や色んな人達が居ると思いますよね、このまま行ったら…」

小林「うん」

水島「大井さん、どうですか。ハリスがなった時、さっき言ったような政策を、ぼんぼんやったら、もう経済も何もメチャクチャになるから」

大井「めちゃくちゃになりますね。人類家畜化に向かって、これがアメリカかっていう感じになると思うんですよ。だから、今から、どういうことが起こるかって言うと、大体、選挙人っていう人が間接選挙で投票する訳ですけども、11月5日が大統領選挙の日ですけど、大体10月15日ぐらいまでに期日前の投票をする人が多いらしいんですね」

小林「うんうん」

大井「ですから9月10月で、11月5日に、もう圧倒的にトランプが票の数で勝てばいいんですけども、そうでない場合、まあ、トランプが勝ったとしても勝ったら勝ったで、アンティファとかBLM、ブラック・ライブス・マターとか、そういう人達が一斉に蜂起するかもしれない」

水島「そうですね」

大井「もし、僅差とか、よく分からないで11月6日、翌日ですね、投票結果が判明しない場合には、また2020年1月6日みたいな選挙人団による選挙結果を公式に数えて、議会在正式に、この人が勝ちましたって確定するものがあるんですけどね。そこでも、どうなるか分かんない」

水島「はい、そうですねえ」

大井「1月の二十何日かに、じゃあ、大統領が決まりました。それで聖書に手を置いて宣誓しますよね」

小林「うん」

大井「それもあるかどうか分かんないし」

水島「ですねえ」

小林「分かんない」

大井「だからねえ、恐ろしいことに、もし1月6日の選挙人団で、また、ゴタゴタがあった場合、或いは、トランプが投獄されるか、暗殺未遂があるとか、色んことがあった場合ですよ。もしかしたらバンス副大統領が大統領になる可能性もあるんですよ」

小林「うん」

水島「なるほどね」

大井「バンスは本当に叩き上げて言うんですか」

水島「まあ、そうですね」

大井「貧しい所から身を起こして軍隊に行ってイラク戦争を戦って」

小林「海兵隊（笑）」

大井「それで大学を出てイエール大学の、かなり優秀な Law School で」

水島「優秀だったらしいですね」

大井「Lawyer になって、最初、シドニー・オースティンっていうニューヨークのピカピカの Law Firm に入る訳です。だから、それを聞いた時に、ああ、この人は相当、切れて、言葉も素晴らしいし、凄いんだなあっていうのが分かる訳ですよ。そこからカリフォルニアに行ってベンチャー・キャピタルとか色んなことをやって、まあ、どっちにしてもトランプもバンスもビジネスマンだからディールがよく分かる」

水島「そこですよ。実務を知っているっていうね」

大井「あと軍隊に入って、本当に戦ったっていうんですか、苦労しているから色んな事が、よく解る」

小林「うんうん」

大井「だから、今の総裁選と比べたら、はっきり言って人物が違いますよ（笑）」

水島「ねえ、それは全然、違うね」

大井「全く。進次郎とそういう苦労したバンスとね」

山中「二世、三世とね、他でもアメリカでも働いたことがない」

大井「ない」

山中「お父さんの秘書をやったぐらいで、あとはもう選挙出て、鞆、看板、地盤ですか。全部、くっついてきたのと、バンスとかトランプという叩き上げの人達と比較にならないですよ」

小林「うん」

大井「だって、トランプはね、何回も死にそこなっているから（笑）」

小林「そうねえ」

大井「強いですよ」

水島「大分、前ですけど、中国の社会科学院っていうスパイが言ったのは、中国の指導者達は当時、6億の中国人の中で命懸けでやって負けたら殺されるっていう中で、のし上がった連中ですよ。それは申し訳ないけども、水島さん、日本の総理とは比較になりませんって酔っぱらって言っていました。岡崎久彦大使と日中戦略会議をやった時、その社会科学院の、まあ、スパイですけども、その人が本気なのか嘘か判らないけど言いたい事を言っていましたね。そんなもの比較になりませんと。さっき言ったバンス副大統領候補だってそうですよね。やっぱり軍隊経験者で結構、痛いとか苦しいとか肉体的な恐怖とか、色んなものを知っている人間と、それから実業の世界で事業を起こした奴、それは権謀術数も含めて、こういうものを行った人間は居ないですもんね、今、おっしゃったように（失笑）」

山中「いないねえ」

水島「さっき宇山さんが言ったように、政治を目指した時、党員獲得の悔しさや辛さを、2

世議員とかこういう人達は解らないですよ。だから、実は、そういう人達が日本の政治を担おうとしているというか、神輿が軽い方がいいっていうね（失笑）、そういう空っぽの方が何でも言うことを聞くっていうね、そういうことかも分かんないんですけどねえ。

ただ、今の大井さんの予想、宇山さんは、どう思いますか、意外と言われていないですよ。大変なことになるっていうのは、みんな、言っているけどもね。

宇山「うん。私は先週、ある二人の大物国会議員と会食をする機会がありまして、自民党の国会議員ですけれども、政府与党として、この大統領選を、どうアナライズしているんだと」

水島「うんうん」

宇山「どっちが勝つと見越して、この外交戦略を組み立てていっているんだという質問をした訳です」

水島「大事な質問ですよ」

宇山「どうも政府与党は、圧倒的にカマラが優勢だという見立てを立てていると」

深田「え〜っ」

水島「はあ〜」

一同「え〜…」

宇山「それで、ただね、但しですよ。但し、いつも政府の見立ては、間違ふということが大前提なんですね。例えば、クリントンとトランプの時には、これはクリントンが絶対に勝つというように、日本政府、外務省、現地の大使館を含めて調査をしていたんだけど、どうも、そうじゃないということが、その投開票の数日前ぐらいに判って来て」

水島「判って来たんだ」

宇山「慌てて安倍総理が、あの時、トランプ陣営の方に電話をかけて、その関係を繋ぐというようなことをしたという話も聞きました。私の予想と致しましては、未だ共和党の優勢っていうのは崩れてないんじゃないかなあと。やはり、この大票田のペンシルベニアで、若干、カマラが有利、リードということが言われていますけども、しかし、やはり隠れトランプというのは、かなりアメリカにはおりまして、本来、3%以上ぐらいのリードが無いと、民主党にひっくり返るっていうことは無いと、私は思っているんですよ。

あと、不〇選挙もですね、これも食わして来るということもあり、状況は、ちょっと判りません。それとね、もう最後ということなので、一つ総裁選についても言わせて戴きたいんですけども、この総裁選で議論されている時間の大半が例の裏金問題」

水島「うんうん」

宇山「これに、かなり時間が使われている訳ですよ」

水島「うんうん」

宇山「その枠組みの文脈の中で高市さんが発言をしたことが今、ネットで非常に話題になっているんですね。議員の月収、手取りとしては大体20~30万ぐらいしかないということを高市さんが言って、そんなはずないだろうということで、話題になっているんですけどね。

実は、私も、ずっと政治の手伝いをしてきまして、議員の事務所なんかにもおりました秘書のような仕事もしてきましたけれども、本当に、そんなもんです。20～30万ぐらいの手取りというものです。

これね、どういう計算かと言うと、大体、議員の歳費、年収は2100万から2200万円ぐらいです。それで何処の事務所でも公設と政策秘書とは別に、私設秘書を大体6人ぐらい雇うと。地元で4人、東京に2人。地元で6人という場合も結構、多いと思うんですけどね、公設と政策秘書は公費で負担をされます」

水島「うんうん」

宇山「ですから、これは議員が持ち出さないけれども、私設秘書を使うということになれば、議員がポケットマネーから出さなきゃいけない訳です。6人、雇ったと。仮に、その6人の年収が300万円だとすると、これで1800万円が消えてしまう訳です。だから自分の手元に300万円しか残らない。高市さんが言うように、手元には20～30万円しか残らないのだと。高市さんは、これが実態だっていうことを言っているけれども、実は、これって、本当の話です。これじゃあ、やっていくこと出来ないよねと。妻子を食わしていくことすら出来ないよね、ということで、ああいう裏金だの何だのと、色んなお金のルートというものが出来てきているというのが現状ですね」

水島「うん」

宇山「だから、ちゃんと秘書軍団というものを整備してやるべきだと思うんですよ。何年前、10年以上前ですよ、この政策秘書という者が議員のブレインの一人として政策を考える専門の役職として、これは公費で負担をされていくと。実は、私もこの政策秘書の資格を持っておるんですけども、じゃあ、実際に政策秘書ってというのは何をしているかって言うとお茶汲みしているだけです」

水島「うん」

宇山「冠婚葬祭で呼ばれて祝儀やら何やらを持って行って、運動会に呼ばれたら挨拶をして、或いは、飲み会に呼ばれて地元の付き合いをするということだけで、実際には政策秘書なんかやっていないんですね。政策を本当に作っている、そういうブレイン的な秘書なんていうのが一体、何処に居るんだというぐらい、実際には、そういう形にはなっていない訳です。

ここに、もっと予算をどんっと投じて、ちゃんと議員が官僚主導じゃなくて、官僚からレクを受けて、どうのこうのと判断するんじゃなくて、自分達の頭で判断できるような、そういう政策集団としての秘書集団を各議員につくらせていくということをしなければ、これはもう、いつまで経っても官僚主導、霞が関主導ということになって来ると思うんです。

それと、もう一つ、ちょっと言わせて戴きたいんですけど、選挙制度は小選挙区制ということで今、きていますけどね、私は、とにかく、これが駄目だと思っているんです」

水島「うん、そうだね」

宇山「これを変えなきゃならない。大選挙区制に変えないと、政治に益々活気が無くなって来ると思いますよ」

水島「全くその通りですね」

宇山「ええ。というのはね、昔、サンデー・プロジェクトという番組が15年ぐらい前に終わりましたがね、田原総一郎さんが出ていた番組があって、ここで自民党の議員同士が唾を飛ばしながら大喧嘩して、テレビカメラの前でワイワイやっていた訳です。私は高校生ぐらいでしたけれども、高校生ぐらいの時からそれを見て、ああ、政治家っていうのは、こういうものなんだということがよく解ったし、政治家にどんな人達が居るのかということもよく解ったけれど、今、そういう番組が無いでしょ。何故、無いのか。それは政治家が通り一遍のことしか言わなくなったから、面白くない。視聴率が取れない。だから、ああいうサンデー・プロジェクトという番組も無くなっていった訳です。

じゃあ、何故、政治家がこれだけ面白くなくなったのかと言われると、これは小選挙区制という制度の中で、党の力が非常に強くなった。公認権を党が持つと、公認をされなければ、選挙に通らないということの中で、みんな、党の上のことばかりを考えて物が言えなくなっちゃったという現状が、こういう政治を面白くなくさせている一番の原因だと思うんです。

私は今の時代ですからね、大選挙区制でネットもありますから、別に小選挙区の自分の地元だけ歩いているというだけじゃなくて、全国に向かって様々なメディアで発信をすることが出来ると。全国を一つの単位として一斉に選出をするというような大きな選挙制度の、今の時代にあった制度変更ということを経営がやらなければ、もう、いつまで経っても、政治の停滞というのは続きっぱなしの状態になるということをお願いしたい訳です」

水島「いや、全くその通りですね」

大井「賛成ですね。あと政治家の数も減らして欲しい（笑）」

水島「いや、全くそうですね。これも全くね、今、700人ぐらいですか」

大井「そんなに要らないですよ、どうですか」

小林「私も今度の選挙は凄く不安です。不安。結構、民主党に居る人達とか議員とか、何かテレビに出ている評論家とかレイチェル・マドゥルとかね、トランプが勝ったら自分は刑務所へ行く。もしかして命を失う。本当に信じている。それを信じているので、選挙で、何か変なことをする。それ、結構、怖いんですよ。偉い民主党の人達が、そういう風に言っている。変な事やっているのは確かに居ますよ。本当にトランプが大統領になるんだったら自分も危ないと。あ、あれもそうですね、ストーミー・ダニエルズという元ポルノスター。彼女はトランプが大統領になったらアメリカ出ると。あ、どうぞ、何処かへ行って、日本には来ないでね（苦笑）」

水島「いやいや、ねえ、エマニュエルさん、どうするんだろうっていう気もしますけど」

一同「（苦笑）」

水島「でも真面目な話、今、そういう選挙で命懸けですよ。多分、トランプ派の方もどっちかになることによって殺されたり、刑務所に入れられたりね」

小林「うん」

水島「そういう危険は凄くて、今、命懸けでやっている可能性がありますよね」

小林「あります」

水島「そういう人達はね」

山中「スティーブ・バノンが刑務所に入れられちゃいましたからね」

水島「ね、そう。バノンさん、入れられたんだよねえ」

山中「未だ出て来ないですから」

水島「そうなんですよ」

山中「出て来られないですから」

水島「だから、そういう意味で言えば、トランプ自身も負けたら入れられるという可能性もあるしねえ。だから、それだけ真剣勝負な訳ですけど、今、宇山さんが言った大選挙区の問題、本当に、それをやらないと、もう全然、民主主義じゃないからね」

宇山「(頷く)」

水島「金が無ければ、組織が無ければ、党の言うことを聞かなきゃ、立候補が出来ないです」

深田「先程、宇山先生がおっしゃった通り、日本の国会議員も、もっと議員秘書の数を増やせるような予算を国から付けた方がいいと思うんですよ。アメリカなんかではね、やっぱり、議員一人当たり130万ドルとか200万ドルぐらい付けて、秘書を沢山雇えるような、そういうお金がちゃんと別で出て来る訳です。そうすると、私なんかアメリカに行っても国会議員に秘書さんが沢山居るので、ワシントンDCで秘書さんに自分の様な外国人でもちゃんと対応して貰えるんです。

あとは、日本の秘書とアメリカで秘書っていう名前がついている人達と、全然、レベルが違うんですよ。物凄く残念な事ですけど」

水島「一種のブレインを持っているね」

深田「アメリカでいう所の Scheduler みたいなね、時間のスケジューリングをして、あと、お茶を出す程度の人を、日本では秘書って呼んでいて、何か、ちょっと温度差っていうかね、全く頭脳のレベルが違うんですね」

水島「違いますもんね」

深田「そうやって、きちんと予算を付けて、一人当たりの議員が、しっかり10人、20人、30人と秘書を雇って、あとインターンの大学生で、今一番勉強している人達を沢山雇って、政策の議論をするということをして、人材も育てられる訳です。そういったことが日本では全然、出来ていない訳ですよ。本当に宇山先生のおっしゃる通り、そういう日本の国会議員にも、しっかりと秘書を沢山雇えるような、そういうお金は国から出した方がいいと思うんです。これが政党交付金とかではなくて、議員一人一人に直接払われないと、国会議員が政党にしがみ付くことになってしまうと思うんです」

水島「うん、駄目だね」

深田「ただ秘書を雇うお金の為に裏金を作っているのかと言うと、それは全く別の問題で、秘書を雇うのであれば裏金にする必要が無い訳ですよ。何故かと言うと、普通に政治団体に入れて給料として払えば、それで済むだけの話で、裏金にする必要が全く無いんですよ。

じゃあ、何故、裏金が必要ですかってなると、収支報告書に書けないことに使うお金だからこそ裏金になる訳です。だから議員の手取りが20万、30万円になるような、私設の秘書に給料を払わなければならないので、そうやって自分達は裏金が必要なんだっていう言い訳をするのであれば、それは間違っていると思いますね」

水島「今の問題で言うと、一つは相当、政治資金規正法とかね、こういうもの自体も緩いっていうか、何をやっても領収書さえ出せば認められちゃうぐらい緩いはずなんですよ。それでも今言ったような問題があるし、それと、もう一つ、宇山さん、議員でちゃんとしている奴が居ないとね。私が知っている議員でね、比例で通った奴。地元の面倒見る必要が無いから、もう食べまくる。もう一期でいいやって言ってね、二期いったら、それでいいやっていうことで、もう何から何まで金儲けの為に、殆ど地元周りをする必要も何も無い。何もやる必要が無い。もう金を貰うだけ、色んなところでも食べまくった奴が居るってね、実は、そういうのも居るんですよ」

宇山「秘書の雇用実態が無いのにね、秘書給与だけポッポするとかね」

山中「そうそう」

宇山「広瀬恵氏なんか、正にそういうことをやりましたけどね」

水島「そうそう。そういうのをやりましたね」

宇山「ええ」

水島「だから、自分の身内とかね、全然働いてもいない奴をね、そうやってやるっていうねえ。だから、そういうところを、どうやってきちっとやるかということもある。やっぱり、今言った様に、そういう秘書は、きちんとブレインとしてね。

もう一つは、中選挙区の時、族議員でしたね。あれはねえ、正直言うと、私は知っていますけど、みんな見識を持っていた。農業なら農業とか色んな分野で、役人も結構言い負かされるぐらい、議員そのものも勉強していた。その為には秘書も資料とか色んなものを出さなきゃいけない。だから族議員が居なくなっただけっていうね」

一同「う～ん」

水島「それで小選挙区で党主導になってしまった。これで馬鹿ばかりが集まるというような状態になっているのは確かだと思いますね」

大井「さっき宇山さんがおっしゃったような大きな選挙区にして、深田さんがおっしゃったようなコングレッションナル・フェローっていう、要するに本当に政策を大学院レベル以上の頭脳で論文を書いたり出来るぐらいの人達で政策論をきちんとやって、それを、その議員が地元に行って話すと。だから、地元の人達も、ここは、こういう風にして欲しいっていう要望を、ちゃんと秘書に、秘書っていうか、そのフェローに伝える訳ですよ」

水島「うん、そういうのが本来の民主主義なんだけどね」

大井「そういうのが、本当の本来の民主主義です」

山中「政策立案チームですかね、議員一人一人が持っているような…」

大井「1986年に高市早苗さんはワシントンDCで私と一緒にいたんですよ」

深田「へえ～」

大井「彼女は最初、パット・シュローダーっていうレーガン政権時の民主党の女性議員のところ、松下政経塾から修行に行ったんですよ。その時にシュローダー議員の下に、色んなコングレッショナル・フェローが居て、そういう人達が地元に行って一つ一つ要望に応じて、ちゃんと地元と政策の上で、みんなの意見を吸い上げていたっていう実態を見ている訳。

彼女は日本に帰って Other Tax Payer という、要するに納税者の一人として、こういうことを貴方に言って、こういう政策を実現して社会をもっと良くしてねっていうことを、ちゃんと議員として吸い上げて、これが民主主義だっていうアメリカを、ちゃんと見て学んでいるはずなんですよ（失笑）。

だから彼女は、私が最初に会った時から、私は宰相になるんだって言うていたから、最初から、そういうトップを目指していて凄いなあって思ったんですけど。だからね、そういうのを貫いて欲しいですよ。でも、その為には、やっぱり選挙システム全体を変えていかなきゃいけないし、ちゃんと政策を作る人じゃないと政治家になっちゃいけないですね」

水島「いや、そうですね。だから小選挙区を、みんな変えた方がいいと思っていますよ。でも誰がやるんだって言ったら、その恩恵に預かっている、ぬくぬく生きている連中が議員をやっているという矛盾ね。悪党に泥棒をやめろというね（苦笑）。泥棒をやめて、善人になれっていつているようなものでね、というような問題ですけど、本当は何とか実現しないといけないですよ。それでないと、日本のねえ、民主主義じゃないですから。

それと、もう一つ言うと、いつも繰り返す言うんだけど、ちゃんと陰で支配している人達にとって、こんなに都合のいい小選挙区制って、実は小沢一郎がやったんだけど、ああ、なるほどなあと。アメリカの支配層が、きちっと日本統治のやり方として編み出したんだというようなことがよく解ったっていうねえ、今になって思えばですけどね。二大政党制とか言って、みんなで作ったでしょ」

山中「実態は一党独裁ですよ」

水島「そうそう」

山中「一党独裁ですね」

水島「はい」

山中「だから、本当に日本のシステムの特徴として、やっぱり自民党のうち約半数が2世議員だ、3世議員だっていうことになりますとね、その支配層にとって、それが都合いい訳ですよ」

水島「そりゃそうですよね」

山中「2世、3世、その若い人達、みんな殆ど、アメリカの大学に留学してきますよね」

水島「はいはい」

山中「小泉さんもCSISとか行ったりしていますよね」

水島「はい」

山中「向こうで全部、ある意味、洗脳されて、若い時から着々と育てられて議員になる訳ですよ。それと、2世が一番いいんですね。だからシステムの繋がるような形で、お父さんのあとを継いで、アメリカの言うことを聞いてという形が、しっかりと、日本の選挙方法っていうか、政治の形の中に組み込まれちゃっている。そして、その為には、やっぱり2世がいいという」

水島「そういうことですね」

山中「ええ。非常に怖いシステムというか」

水島「まあ、GHQは上手いことをやったなあ」と

山中「ええ」

水島「フルブライト留学生から始まってね」

山中「そうなんです」

水島「色々、こういうような形で…でも、これをちゃんと暴いて、知って、変えていく作業を始めないと、日本は本当に良くなっていかないと思います」

小林「うんうん」

水島「最後に一言ずつ載いて終わりたいと思います。今回は、深田さんから始めましょう」

深田「あ、有難うございます」

水島「はい」

深田「アメリカの大統領が誰になっても日本の総裁が誰になっても、自分達は自分達の意見を貫いていくっていうことを、やっぱり地道に続けていかないと、この国はよくなっていかないかなと思います」

水島「はい、有難うございます。では、宇山さん」

宇山「高市さんが9日のテレビ討論の中で、こういうことをおっしゃっているんですねえ」

水島「はい」

宇山「非核三原則を堅持するとしていて、米国の核の傘の下で抑止力を得るとするのは矛盾すると。先程、社長も、この件に触れられましたけどもね、この話っていうのは、アメリカの核の傘が効いているという前提で、ものを言っておられる話だと思うんですよ。そもそも、この核の傘なんて全く効いていません」

水島「はい」

宇山「仮に中国が日本に対して核ミサイルを撃って攻撃をしたと。それに対して日本の代わりにアメリカが中国に対して核を撃ち返してくれるか。絶対、撃ち返してくれないと思います」

小林「うんうん」

宇山「その意味では、核の傘なんて、もう、とっくの昔に幻想になっている訳ですよ。今や

大陸間弾道ミサイルが300発、中国からアメリカに対して向けられているという現状で、自分達の国が危険に晒されるのに、どうしてアメリカが日本の為に、中国に対して報復をしてくれるなどということがあるのでしょうか。まず、こういう古い形の議論をやめてくれと。

そうじゃなくて、日本が自衛のための核武装をするということの可能性を模索するというような話が出来れば、それが一番ですけど、今の政治環境では到底できないとは思いますが、本来こういうことをするべきだと、私は思います」

水島「そうですね」

宇山「はい」

水島「本当は一人ぐらい居て貰いたいですけどね。では、石田さん、どうぞ」

石田「さっき小選挙区の話が出ましたけど、僕があちこちで講演会やる時に、結構、政治家の方が参加されるんですよ。自民党ですとか、立憲民主党ですという方々が結構いらっちゃって、でも自民党を辞めたいんですよとか、立憲民主党も辞めたいんですよと、でも辞めて今度、無所属で出たら後ろ盾がないので辞められないんですよ」

水島「うんうん」

石田「元々は志を持って政治家になったはずなのに、自分のアイデアとかを言おうとすると、もう叩き潰されると」

水島「うん」

石田「上からの命令で全部、動かされているから、結局、ロボット議員がどんどん作られていくっていう状況が出ていると思うんですね。だから、正に支配者層からしてみたら都合のいい制度であって、それと同様に官僚とか国家公務員とか色んな市区省庁も同じように、やはり僕の話聞きに来てくれる人で、元財務省とか元外務省とか、そういう人が結構、居るんですよ」

水島「うん」

石田「ああ、そうなんですかあ、何で辞めたんですかと、何故、外務省を辞めたんですかって聞いたら、いや、色んな外交アイデアを出しても結局、アメリカに忖度をする人が出世していくんですけど」

水島「うん、まあ、そうだな」

石田「だから余計な外交政策とか、そんなアイデアとか出して来る奴は職場から干されると」

水島「危ない奴っていうことだね」

石田「危ない奴っていう風に職場で思われて、場合によってはパワハラ的な感じにあって、もう、あいつは相手にするなみたいな感じで干されていって、それで居辛くなって辞めていくとかね。例えば、財務省を辞めた方も来たんですけど、何故、財務省を辞めたんですかって聞いたら、実は、日本の政府がウクライナにお金を出す為に、それを正当化するレポートを作らされていると」

水島「(笑)」

石田「ゼレンスキーは善い人だの」

水島「(笑)」

石田「ウクライナは凄いだの、それだけで、もうプーチンは悪だ、ロシアは悪だみたいな、ありもしないことも無いもしないものも、うわあ～って毎日、毎日、それでレポートを書くのが財務省職員の仕事だったと」

水島「それも辛いだろうねえ」

石田「そう、職員の仕事だったみたいで」

深田「フィクションみたいで(笑)」

石田「そうなの。ある意味、小説家ですよ」

一同「(笑)」

石田「小説みたいなことを書かされるんだって。それで、カズさんの越境3.0チャンネルを観ていますって、マックスさんのチャンネルも観ています、深田TVも観ていますと。もう、そういうのを観ていて、私は、そういうレポートを書いているのが罪深くなりましたと。それで、その財務省が作成したレポートをもってウクライナに支援する何兆円だかが、正当化されるっていう、それを支えている仕事が本当に罪深くて、もう辞めましたと」

水島「なるほどねえ」

石田「だから同じように厚生労働省の人も来ましたよ」

水島「うん」

石田「お注射の件とかね、あれだって、やっぱり役人とか国家公務員の中にも良くないって思っている人がいっぱい居るんですね」

水島「うん」

石田「居るんだけど、彼らは声を上げると、もう職場に居られなくなる。干される」

水島「うん」

石田「だから、結局、何か凄く正しい事を考えて、志を持っている人が居たとしても、政治家の世界でも国家公務員とか省庁の世界でも、そういう人は、どんどん干されていくと」

一同「う～ん」

石田「それが今の日本の現実ですよ」

水島「そうですねえ」

石田「だから、そういう人達が、もっと気づいて横に繋がって、何が正しくて正しくないのかという情報を、どんどん広めていく活動が必要だと思うんですね。特にテレビと新聞しか見ていない、例えば地方の方とかね、まあ、そういう方なんかは、こういう話をしたら、それは陰謀論だと言うんですよ、田舎の人はね。いや、それは陰謀論でも何でもなくて、実際、そういうことが起きているんですよ。だから日本人一人一人が、それを変えなくちゃ、も

う本当に崖から突き落とされますよと。今、ヤバイ、結構ギリギリの状態に居るんだっていうことを、多くの日本人に伝えていかないといけないなあと思って、その役割としてのチャンネル桜も大きいですよ」

水島「そうですね」

石田「役割は」

水島「でも本当に今言った様に、コツコツでも一人でも二人でもが発言していくしか無いっていうね」

石田「そうですね」

水島「今ねえ、一気に変えるってことが簡単に出来ませんからね」

石田「うん」

水島「本当に、宇山さんが言った様に大選挙区制にしたらねえ、日本は本当に良くなると思いますね」

石田「ああ、変わると思う」

水島「いい人材がねえ、ぶわあ〜っと若い子がね」

石田「志のある奴が、どんどん手を挙げて来るんですよ」

水島「ね」

石田「うん」

水島「本当にそういう気がしますけど、何とかしましょうというね、ええ」

石田「うん」

水島「じゃあ、大井さん、お願いします」

大井「有難うございます。やっぱり戦後80年で、私達が育ってきた社会システムは全て、政治も含めて全部、嘘だったんじゃないかと」

一同「うん」

大井「結局、我々は何か幻の中で繁栄を見て来ただけで、今、カズさんがおっしゃったように、本当に今、組織の中で良心を持った人が潰されているじゃないですか」

水島「うん」

大井「本当のことを知りたいとか、テレビや、もう主流メディアは嘘ばかり言って、まあ、アメリカでも明らかになっているし、日本でも大体、常識的な人は解っている訳ですね。だから、それをどうやって横の連携を繋げて、本当にゼロから、日本はこれからどうやって生きていくんだと。チャンネル桜で政策提言するぐらい、みんなで纏まって声を上げるしかないと思います。

それでアメリカはアメリカで色んな団体があって、やっぱり草の根的な人達がいっぱい居て、

それなりの活動をしていますし、それと地域、コミュニティを守るっていう意志が凄く強い
ですね」

一同「う～ん」

大井「だから、それは教会とかね、やっぱり信仰心のある人達が居て、日本も同じく信仰心
のある人達って居ると思うんです。それは別にキリスト教じゃなくても、例えば、この間、
雑誌で見たんですけど、いきなり近所の人に来て、お前のところの墓が潰されているぞって
言うんだって（失笑）。それで何だと思ったら、自分ちのお墓のお寺さんが中国人が買収し
て、いきなり…」

石田「ええっ」

水島「いや、そういうの、多いですよ」

大井「今、そういうのがあって、自分の祖先の墓が、いきなり無くなっちゃった。それを、
近所の人教えてくれたって言うんですよ。だから、そういうことが起こっていて、じゃあ、
貴方がたは、貴方の祖先の墓まで潰されて怒らないの？と。そういうことを地元の人達は、
どう思うんですかと。地元になんか起きているのかも知らない。ある日、突然、それこそ、
水源地を買われて水が出なくなったとか、さっきの熊本の話もそうですけど、自分のコミュ
ニティで何が起きているのかも知らない。知ろうともしないし、何かあって墓も潰された
と、お参りに行く所が無いじゃんって言ったら、お盆も出来ないぞって言われて腹も立たな
いって、これはおかしいんじゃないのって、普通、思うじゃないですか。

だから、そもそものところから、ちゃんと日常を見直して地に足をつけて、ちゃんと、みん
なで連帯していくということをしないと、本当に、このままだと80年は何だったんですか
になっちゃいますよ（苦笑）」

石田「恐ろしい話ですねえ」

大井「それ、本当に起きているんですよ」

水島「それはねえ、具体的に我々も調べたことがあって、実際、まずねえ、暴力団系がやっ
たんですよ」

石田「うん」

水島「つまり、もう住職が居なくなった誰も居ない無人のお寺を買い取って、そこに僧籍っ
ていうか、僧の資格を持った人を住まわせて、何をやるかって言ったら、宗教法人だから税
金で色々ごまかせるって」

石田「なるほどな」

水島「それで色んな所に金を寄付させる。寄付っていう形。マネー・ロンダリングみたいな
こととか、それをやる。今は中国人が入って来ている。それで、つまり一番、彼らが思っ
ているのは、何でも商売だから、今、東京都の焼き場というか、あのう…」

深田「火葬場ですね」

水島「火葬場」

大井「あそこね」

水島「今、殆ど中国人が買っちゃったんですよ」

一同「ええ～」

水島「それで、今、値段が2倍になっているんですよ。日本の企業が、このぐらいでやっていたのが、もう2倍になっている。もう一つ言うと、火葬するっていうこと自体が、待たせるとか何かとか色んなことやって、日本人の死まで、ある程度、コントロール出来るようになる」

大井「うん」

小林「うん」

水島「当然、お金を払う訳ですからね。それで、その後どうするっていったら、墓を勝手に潰しちゃうとかね」

大井「そうそう、そう」

水島「色んなことを含めて、日本人が持っている元々の先祖崇拝とか、こういうもの自体まで破壊していくみたいだね。こういうことまで起こっているので、本当に笑い話じゃないぐらい恐ろしい話です」

石田「ヤバいですね」

水島「土葬の話があるじゃないですか、イスラム教徒の土葬をどうするんだとかね」

小林「うん」

水島「本当にそれどころじゃないんですよ（失笑）。そういう問題じゃなくて、火葬場とか、葬儀」

大井「うん」

水島「日本人が死んだ後どうするっていうところまで、ビジネス化しようとしている。それが出来る。死んだ後だと、いくらでも値段を上げることが出来る」

大井「う～ん」

水島「だから本当は、政府がきちっと規制緩和じゃなくて規制しなきゃいけないですよ。外国企業が人間の死とか、そういうところにまで関わるようなビジネスまでやっていいのかと。先ほどの、宗教法人を買い取るっていう話ですけど、法人が売りに出ているんですよ」

石田「う～ん…」

水島「例えば熱海にある何とか寺、十何年前ですけど5千万で買いませんかという（失笑）」

石田「う～ん」

水島「昔、私は、意地悪ばあさんっていう番組の脚本、監督をやったことがあって、主演の青島幸男さんが、おお、水島君、青島教を作って金を儲けないかって言って」

大井「(笑)」

水島「冗談だけと言っていたんですが、それだけ宗教法人っていうのは儲かると。俺が教主になるから、って言ってね、お前は事務総長をやれよと言ってね(苦笑)」

石田「うん」

水島「それだけ税制の問題で、宗教法人っていうのは結構、商売になるんですよ。そうすると、変なことはあまり言えない。宗教弾圧だとかになるからね」

大井「うん」

水島「変な事を言うと、これだって宗教活動だって、いくらでもやれるから、飲んだり食ったり、ねえ、着服だっていうことも出来るしねえ。こういうようなことが色々ありましたっていうことです」

大井「はい」

水島「本当は、この問題も凄く注目して戴きたいと思います。じゃあ、山中さん、お願いします」

山中「実は、今日、札幌とニセコから戻って来たんですよ。講演会がありましてね」

水島「ああ、あそこはヤバイ所ですねえ」

山中「ええ。あれはねえ、いつか、ちゃんと見てみたいなあと思っていたんですね」

水島「はい」

山中「ニセコの現実は、ここまで凄まじいことになっているとはね」

水島「はい」

山中「あの辺の人も最近まで、ほぼ判らなかったですね」

水島「はい」

山中「9割、買われちゃっている訳ですね」

水島「そうです」

石田「9割？」

水島「9割以上」

山中「うん。ニセコっていうのは日本で最高のパウダー・スノーのスキーリゾート、まあ、要するに素晴らしいスキー場がある。だけど、そこへ入っている資本は、最初はオーストラリアの人達で本当にスキー好きの人が入って来た」

水島「はい」

山中「だけど、そうじゃなくて、今は、もうチャイナ、香港、或いは、マレーシアだ、それからフィリピンだ何だ、あと東南アジアがいっぱい入って来て、何のことは無い、かなり華僑系ですね。香港って、もうメインランド・チャイナの金が入って…」

水島「中国ですよね」

山中「どお〜んとね、マカオの人達の、所謂、ハイローラーっていうカジノで遊ぶ人達用は、一泊500万円のホテル・コンドミニアム。これを見てきました。最低7泊から（笑）」

水島「私も見ました」

山中「だけど、とんでもない（笑）」

水島「私が行った時は2年前で200万円だった」

山中「今ね」

水島「もう上がっているんだ」

山中「今、500万円ですよ」

石田「へえ〜」

水島「一泊ですよ」

山中「一泊。そういう、とてつもない所があって、そういうチャイニーズ系の人達が開発している区域がある訳ですね。本当に原っぱ、雑草を刈ってね。そうやって、どお〜んと、いい所にはリッツカールトンとかハイアットリージェンシーが入って来ている訳ですよ。

それで、いい建物で一泊、数十万、30万、50万とかで、そこに泊るのは大体の人は外国人。私は、そこを案内してくれた人と一緒に、お茶を飲んだりしたんですけどね、水島社長の時に行った時は、あのう…」

水島「我々が行った時は未だリッツカールトンとかなかったけど、さっき言った宿泊費は今、500万になっているのかな」

山中「はい」

水島「200万の所は行ったけど、大した所じゃないですよ」

山中「ええ、無いです」

水島「プールも何も無いんですよ」

山中「うん」

水島「もうビジネスホテルに毛が生えて、少し立派にしたぐらいの程度で、何をやっているかって言うと、地下でカジノやっているんですよ」

山中「地下で」

大井「ああ〜」

水島「それで、もう一つ言うと。今、ちょっと変わったかも分かんないですけど、私が行った頃はサンシティ・グループ」

山中「うん」

水島「和歌山県でIRをやろうとした中国マフィアですよ。あのう、香港マフィア。この間、一回、逮捕されたでしょ。もう、これが入り込んでいる」

山中「だから、どんどんサイレント・インベーションで地元の人知らない間に…、そして、水資源の大きな土地も買われちゃった。自衛隊の住むところも買われちゃった」

水島「はい」

山中「実は、これがね、北海道だけじゃなく東北でも似たようなことがあって、例の宮城県は、フランスの会社が水の権利をとっちゃいましたから、こういうことが続々と起こっているのに対して、我々は政治も行政も、ほぼ、まるで動けていない。やっぱり手を挙げる政治家達が居ないってことですよ」

水島「そういうことです」

山中「ええ」

深田「タイとかメキシコのリゾート地に行くと、アメリカのリゾートグループが高級ホテルを建てて、地元の人が入って来られないようにマシンガンを持った人達がフェンスの前に立っているっていうのがあるじゃないですか。地元の人はいれないんですよ（失笑）。そういう地域がいずれ日本の中で出来るんじゃないのかなあみたいと思うんです」

山中「出来ますよ」

水島「出来つつあるんですよ」

山中「出来つつある」

水島「北海道は、チャンネル桜北海道がレポートして、小野寺君っていう元道議さんがやっていますけど、どんどん買われていますよ。1割以上、買われているっていう噂があるんですよ」

深田「う～ん…」

水島「今、お話し戴いたニセコは、所謂、サンシティ・グループで、これは本当のマフィアですからね」

深田「はい」

水島「中国マフィアが完全に入り込んで土地を買って、今言った恐ろしい事を始めている訳ですよ。なぜ500万円かって言ったらマネー・ロンダリングですよ」

深田「うん…」

小林「うん」

水島「そんな、500万円といっても、全然、大したことないですよ。そういうホテルで、今、山中さんがおっしゃって戴いたようにね、7泊しないと駄目だと。我々の時は千何百万円ね、200万円っていうから、7日間で $7 \times 2 = 14$ 、1400万払わないと泊まれない。でも、今は 5×7 、3千5百万円ですよねぇ」

山中「なっちゃったって」

水島「そんな所、あるかって」

山中「プラス税金というんですから（笑）」

水島「それで、ある場所は、もうラーメン3千円っていうね（苦笑）、定食1万円というね」

深田「う～ん」

水島「それから億ションばかり。それも1億円とかじゃなくて、もう5億円だとか」

山中「5億円、10億円」

水島「こういうものを、どんどん建てて、でも誰も入っていないような気もするんだけど、私の時はね」

山中「ええ」

水島「ただ、そういう形で完全にチャイナタウンっていうか、今、深田さんが言った様な、日本人が掃除婦とか、そういうところで、行くしかないぐらいでね」

山中「7割8割は外国人スタッフですね」

水島「ですよね」

山中「そういうハイアットにしてもね、日本語を喋る人は、ほぼ誰も居ない」

水島「なるほど」

山中「全部、英語」

水島「そう」

山中「彼らはフィリピンや色々な国から、英語のできる若い人を直接呼んで来て、日本語は全然、出来なくていいと。お客に日本人は居ないと」

水島「いや、そうなんですよ」

山中「うん。それでベッドメイキングやっている下働きは日本人です」

石田「え～っ」

一同「ええっ」

水島「そう」

山中「使われている訳。これは色々な所で起きますよ」

水島「いや、起きます。私も、ちょっと冗談で、そこの立派なホテルのトイレを貸して貰いたって言ったら、中国人の女性が、はいつて言っただけ、でも日本語は出来ない。でもトイレぐらいは英語で言うと少し判るから。それで中へ入って、ちょっと使わせて貰っただけ、様子を見たけど、本当におっしゃる通り」

山中「(頷く)」

水島「日本人なんか居ないんですよ」

山中「日本人は要らないんですよ。相手にしていません」

水島「もう、そういう租界みたいなものでね」

山中「ええ。租界ですね」

水島「パウダー・スノーのスキー場も結局は大金持ちの外国人ね。まあ、中国人が中心ですけどね。そういう風になっていて、そういう植民地みたいなところが、ぽんぽん増えている。それと、これをやっている北海道の、一応、経済団体、地元の商工会議所のあれが完全にニトリっていう家具屋さんで今、中国とベッタリだから。店舗もどんどん増えて、今、全国規模になっている。こういうところと中国が繋がっているから、ニトリが親中の政治家や何か集めるとかね。それから、もっと言えば会を創るとか、土地を買うのを中国が急に直接できない時は、そういう連中が、お先払いして北海道の土地を買って、そこから、また中国に譲る。

上海電力が大阪でやっているようなことが、もう、どんどんやっていますよ。一番、典型的なのは、釧路湿原に20万枚のソーラーパネルを、もう、やっちゃったことですよ」

山中「ああ〜」

水島「釧路湿原ですよ。霧と雪と氷に閉ざされる所に太陽光パネルを20万枚。空撮で撮りましたけどね。今、おっしゃるように、どんどん進んでいる。それを成すがまま、日本の政治家と地元の人達は、お金さえ入りやいいみたいなことになっているということですね。はい。どうも有難うございます。実は、大変、怖いレポートですよ。はい、ではお願いします」

小林「はい。アメリカの選挙が凄い争いで、今、結構、親米が多いんですよ。アメリカを頼っている日本人が結構、居るけれど、アメリカも本当に、あと1年間、半年でも判んないよ。存在があるかどうか判らない。投資している国とか何かね。どうなっているか判らないけど、これだけ約束できる。悪い方へ行きます」

大井「うん」

小林「悪い方へ行きます。トランプが大統領になってもブレーキ役。アメリカ墜落のブレーキ。ハリスだったら、もう急降下みたいな感じ。特急みたいな感じで、ぐわあ〜んと墜落します。日本は自然的にアジアのリーダーの国です。これから日本人は、そういう意識に戻らなければならない。これが外交とか軍事力で、どういう風に軍事力をつくるかと。革命しななければならない。こういうのは今のリーダーよりは新しい日本人も必要。居るよ、こういうことを考えている人達。

日本には望みがある。昔の明治維新みたいな感じで、令和維新ということをしなければならない。これから私の本の中に色々計画を書いているから、皆さん、それ、読んで下さいよ。ねえ（笑）」

水島「はい、これです。はい」

小林「はい（笑）」

水島「今日は、総裁選、アメリカ大統領選挙を議論しましたがけど、結局、日本の在り方とか

ね、世界の在り方が今、問われている。つまり、今、アメリカ自体が分裂しているということと、世界を今、コントロールしている人達は、ユダヤの人が中心ですけれども、国際金融資本とか国際武器商人。エネルギーメジャー、食糧メジャー、そういう類いの1%と言われる人達が今、どういう形で世界を考えているか。

同時に、ブリックスとか、グローバルサウス、こういった問題も含めて、そうじゃないんだってという声も上がり始めている。日本の中にも、このような今迄の従米体制というか、これじゃいけないんじゃないかという人達、本当に増えていると思います。その中で、やっぱり、さっき何方かがおっしゃって下さったように、多くの形で日本を主語にした連合体、政治連合を創っていかないと、本当に中々難しいと思います。

それぞれ考え方は、みんな、違うと思います。例えば、よく、ここにも出てくれている原口さんっていう立憲民主党の議員さんは、ほぼ、私と大体、経済とか何だかとか言っていることが似ているところがあるんですよ。ただ私は核武装論者ですけど、彼は、絶対に嫌だって言うんだけどね。でも、それはいいんですよ。

つまり、じゃあ、どうやったら具体的にやるかっていうことをやれば、日本の国民が幸せになる、もっと言うと、どうやったら平和や安寧を実現できるかっていうところで、それぞれ、減税の問題とか大きなところで一致すればね。具体的なところをどうやるかっていうことよりも、みんなで集まって既成の、少なくとも今迄の日本の戦後体制が、大井さんが言っていた様に、もう限界に来た。有難うと、まあ、私は言いたくないけど、でも、ご苦労さんという形で日本の戦後80年のお葬式を綺麗に出してやる。

だから、我々が見事にやり遂げれば、本当に日本の再生というか復活もあるかも分からない。本当にお葬式を出しましょうよ。派手にやるか荒事でやるか、優しくやるかは別としてね、とにかく、こういうものが今、求められているって言うのと、もう一つ、私がいつも言っている事ですけど、革命とか維新というのは、その成果を味わうことが出来る人と出来ない人が居る。

だから、もっと言うと、今、我々の場合は、やる事をやっても、その成果を知らないまま倒れていかなきゃいけない、こういう人達が、もしかしたら日本にはあるかも分からん。こういうことを、やっぱり自覚した方がいいと。まあ、私はいい歳ですから、そういう覚悟が少しは出来ているつもりですけども、担う人は、倒れる人が沢山、居なきゃいけない。

いつも言いますが『ますらおのかなしきいのちつみかさね、つみかさねまもるやまとしまねを』という、特攻隊員がそうだったように、そういう意味で、本当に今、時代の転換期の中で、私達は、どう生きるかっていうことをね、もっと言えばどう死ぬか、どう戦うかっていうことを今、問われていると思います。今日は、皆さん、本当に有難うございました」

一同「有難うございました」

***** お わ り *****